

福岡教育大学書道科所蔵書跡目録解題 (四) 日本書跡 (1)

The explanatory notes on Fukuoka educational college SHODO course's collection of classical sho-calligraphy's catalogue IV. JAPAN handwriting calligraphy (1)

福岡教育大学美術教育講座書道分野

(平成26年9月30日受理)

前言

本研究は、本学書道分野が収蔵する書跡について、その書跡の成立、歴史的経緯、書跡の現状及び書学におけるこれらの活用意義等について明らかにするものである。

先に「書跡目録解題 (一)」「同 (二)」及び「同 (三)」として、所蔵書跡のうち、中国の碑石拓本や肉筆書跡の整理・解説をしたが、今回は、日本書人の書軸等を取りあげることとした。本学収蔵の日本書跡には、亀井南冥や大隈言道など郷土に関わった書人の書跡が複数点に及ぶが、今回は、それら以外の書跡について集載した。なお、作品の整理にあたっては、これらの一群を「日書」とし、書者の生年順に配列した。所蔵書跡の保存状態は、必ずしも良好なものばかりではなく、その尺寸の計測にも時間を費やすこととなったが、書字内容の確定はじめ、背景の考察等は決して容易な作業ではなかった。それらの任をこなしてくれたのは、本学大学院教育科学専攻(美術教育コース書道分野)所属の小形有香・立和田典子・長谷川遥・八谷勝生・曾我部綾音・豊百合・高静の院生7名である。

研究にあたっては、進められた個々の調査内容・執筆原稿を更に全員で検討し脱稿したが、未だ釈字の確定しない部分もあり、また、表記上の過誤もあろうかと思う。諸賢のご教導をお願いするところである。

(小原記)

凡例

1. 本編は、書道分野所蔵の日本人の手になる書跡のうち、亀井南冥及び大隈言道等、郷土に縁故のある書人の書跡以外の38点について、その書者の生年順に配列し論じた。
2. 作品名は、本学備品原簿記載の名称を基盤としたが、作品内容との関係から、一部新たな名称に変更したものもある。なお、本論での整理番号には、「日書」を付し(例:日書1 荒木田守武 俳句二種)、欄外に備品番号を記している。
3. 本編の構成は、基本的に、解説本文、所蔵書軸の写真、部分図版、比較図版及び、欄外注釈とからなっている。
4. 解説本文では、書字された文章内容について、書者についての事項、その書風等、考察した内容をあげている。さらに、書学習上の資料としての価値等についても論じている。
5. 原則として、本文・欄外注ともに、解説においては新字体によって表記したが、釈字や引用文の一部については、原文を尊重する立場から旧字体・異体字等に拠ったところもある。また、項目担当者によって、数字の表記等異なる点もある。
6. 文献の引用においては、書名は『 』で示し、書き下しを心掛けたが、解説の都合上、原文のまま引用し、その大意を記したところもある。
7. 欄外注では、所蔵備品情報の他、著録引用に関する事項、登場人物の補足説明等、本文で述べられなかった点を補い、充実を図った。
8. 各書跡の責任担当者名は、本文の最後に〈 〉で示した。

目次

日書 1	荒木田守武 俳句二種	47
日書 2	烏丸光廣 仮名書軸	48
日書 3	蕃山 行書軸	49
日書 4	安東省庵 行草書軸	50
日書 5	貝原益軒 京都寺院卷子	51
日書 6	細井広沢 卷子	52
日書 7	関思恭 一行書	53
日書 8	三井親和 一行書軸	54
日書 9	趙陶斎 行草書軸	55
日書10	池大雅 梅詩七絶草書	56
日書11	加藤千蔭 和歌書軸	57
日書12	菅茶山 行書二行幅	58
日書13	太田蜀山人 俳句一首	59
日書14	古賀精里 使面扇面凶	60
日書15	亀田鵬斎 竹石画詩軸	61
日書16	海屋先生 一行書軸	62
日書17	菘翁 嵐挾詩額	63
日書18	市河米庵 四行書幅	64
日書19	市河米庵 五行書幅	65
日書20	市河米庵 六曲屏風	66
日書21	篠崎小竹 行書軸	67
日書22	篠崎小竹 三行書	68
日書23	江馬天江 行草軸	69
日書24	長三洲 行草書軸	70
日書25	巖谷一六 草書軸	71
日書26	巖谷一六 いろは歌軸	72
日書27	三條実美 三條公御歌	73
日書28	日下部鳴鶴 論書軸	74
日書29	日下部鳴鶴 論書額	75
日書30	中原南天棒 七言詩軸	76
日書31	高橋泥舟 一行書	77
日書32	中村不折 五言絶句軸	78
日書33	中村不折ほか 東亜美術会記念合作	79
日書34	宮島詠士 洞明園観牡丹	80
日書35	高田竹山 篆書額	81
日書36	長尾雨山 二曲屏風	82
日書37	井原雲涯 井原雲涯先生書	84
日書38	河東碧梧桐 句軸	85

日書1 あら き だ もり た け は い く に し ゅ 荒木田守武 俳句二種

クE177
軸装

①やまざきそう
かん (生没年不
詳)
室町・戦国時代
の連歌師。俳諧
の開基として江
戸時代に尊重さ
れた。

②そうちょう
(1448~1532)
室町・戦国時代
の連歌師。
そうせき
(1474~1532)
室町時代後期の
連歌師。
しょうはく
(1443~1527)
室町・戦国時代
の歌人、連歌師。

③かがみしこう
(1665~1731)
江戸時代中期の
俳人。別号は盤
子・見竜・東華
坊・西華坊・蓮
二房・獅子庵な
ど。伊勢山田ま
た京都にあって
神道・儒学・俳
諧を学んだとい
われる。その後、
芭蕉に入門。蕉
門十哲の一人。

本所蔵品の筆者である荒木田守武(文明五年:1473~天文十八年:1549)は、室町・戦国時代の伊勢内宮の神官であり、連歌・俳諧作者である。山崎宗鑑^①とともに俳諧の始祖とされる。最も連歌をよくし、早くも文明十七年、13歳で宗祇の連歌集『老葉』を筆写、明応四年(1495)撰の『新撰菟玖波』に兄である守晨とともに一句入集。『法楽発句集』(永正五年:1508)・『合点之句』(天文九年:1540)の連句集、最晩年の独吟『秋津州千句』(天文十五年:1546)など自筆で現存している。有名な『守武千句』は、俳諧千句の最初のもので、これによって俳諧の形式が確立し、俳諧興隆の素地を築いたものとしてその功績は大きい。また、内・外宮の禰宜との一座ほか、宗長・宗碩・肖柏^②と親交があり、特に宗長には深く師事している。

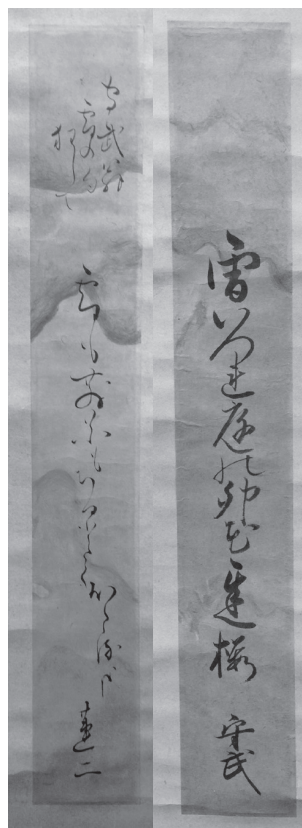
本軸は、縦116.5cm×横30.5cm(紙本部分縦54cm×横28cm)、短冊の大きさは縦35.5cm×横5.5cmであり、右に守武、左に蓮二の句が書されている。この「蓮二」という人物に関しては「蓮二房」「蓮二」を号とする各務支考^③であろう。

積文に関しては以下の通りである。
「雪いつれ(連)庭の(能)卯花遅桜 守武」
「守武翁 雪の句 拜して 雪も散花もちると(登)て(弓)ほ(本)こる(流)哉 蓮二」
また、箱書きには「守武翁たむ」さく雪の句 蓮二拜證」と記され、「□□」「元芳」の印がある。

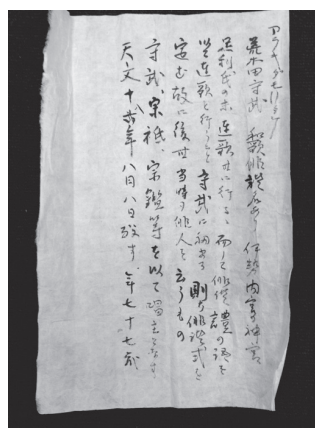
軸箱中には、荒木田守武に関して書された紙がある。内容は以下の通りである。

「アラキダモリタケ 荒木田守武 和歌俳諧名あり 伊勢内宮の神官 足利氏の末 連歌世に行る、而して俳諧言豊の語を以て連歌と行うこと 守武に初まる 則ち俳諧式を定む 故に後世当時の俳人を云うもの 守武、宗祇、宗鑑等を以て 唱主となす 天文十八年八月八日没す 年七十七歳」

「俳祖」と称される守武、「俳聖」と称される芭蕉は同じ三重県の出身である。芭蕉の紀行文である「野ざらし紀行」には、美濃に至り、今須・山中を過ぎたところの常盤御前の墓にて、芭蕉は守武が詠んだ句に対して納得のいかない様子を示し、自分なりにと、一句詠んだというエピソードが書かれている。守武と芭蕉、支考の三人の関係は非常に興味深いものである。本所蔵品の真偽は定かではないが、貴重な資料と言えよう。(八谷)



(部分拡大)



日書2 からすまるみつひろ か なしよじく 烏丸光広 仮名書軸

クE100
S42
軸装

①平安時代、藤原行成を祖とする和様書道流派の一つであった世尊時流が滅亡した後、持明院基春によって独立継承及び発展させた書流。

②寛永時代、最も優れた三人の能書家。近衛信尹・本阿弥光悦・松花堂昭乗の三人をいう。

③ほそかわゆう
さい
(1534～1610)
戦国時代から安土桃山時代にかけての武将・戦国大名・歌人。

④きよはらのぶ
たか
(1475～1550)
室町時代・戦国時代の公卿及び学者。

⑤たくあんそう
ほう
(1573～1646)
安土桃山時代から江戸時代前期にかけての臨濟宗の僧。

本軸の書者、烏丸光広（広）（天正七年：1579～寛永十五年：1638）は、桃山から江戸時代初期の上流公家の出身である。この立場をいかし、関心のある古筆の鑑賞を余念なく行うことのできた光広は、人々から筆跡鑑定を依頼されていた。このことから、書の鑑定を代々務めた古筆家の創設にも深く関わった人物として一目置かれている。古筆名跡にふれる機会に恵まれた光広は、その鑑賞眼を養い、学書の基盤を本格的に整えていった。彼の学書経過を辿ると、始めは持明院流^①の伝統書道を基礎に学んでいたことが知られている。この後、当時の流行となっていた本阿弥光悦や藤原定家らの書に影響され、更に晩年に入ると、藤原俊成や西行といった藤原定家に縁のある古筆名跡からも影響を受けた。その書は、筆勢及び筆法に富んだ技巧派の書として注目される。これに加え、参禅によって体得したと思われる、禅林墨跡の風も認められている。複数の書風を総合的に享受していった光広であるが、最終的には独自の様式とも言える「光広流」の書風を確立させている。多才な能力を持つ光広は、日本書道史において、「寛永の三筆」^②と並称され、書家としても知られた人物である。

光広が得意としたものは書の他、和歌や茶道がある。とりわけ和歌に関しては、慶長八年（1603）細川幽斎^③から古今伝授され、二条派の歌人としても定評を受けていた。代々家業とする和歌を伝えることに勤めた彼は、豊臣秀吉や徳川家康とも親しい間柄にあり、徳川家光の和歌の指南役を担うなど、武家と公家を繋ぐ存在としての活躍も果たした。

また、本阿弥光悦や依屋宗達など、江戸の優れた文化人との交流を行う一方で、清原宣賢^④に儒学を学び、沢庵宗彭^⑤・一条文守に帰依して禅も修めた。

本軸は、縦99cm×横51.5cm（紙本部分は縦28cm×横42cm）である。作品右下に損傷があり、印は押捺されていない。釈文は以下の通りである。

小野、(の) 行し^⑥因き年の因に(耳) 梅の花のさくを/み(三) てよみ(三) 侍け(介) る

冬木に(尔) は(八) かつ(徒) □見せ(世) て行□乃春のには(本) ひを□□る梅□□/光広

第一首：こ(古) れ(連) をさ(左) □いとしのな(奈) らひよ(与) を田守の/なく(具) 御み(三) ぬへ□鹿
のこえ(惠) か(可) な(奈)

第二首：□みし開の清水□け□とけて/□□てやは(者) るに(耳) □相坂の山

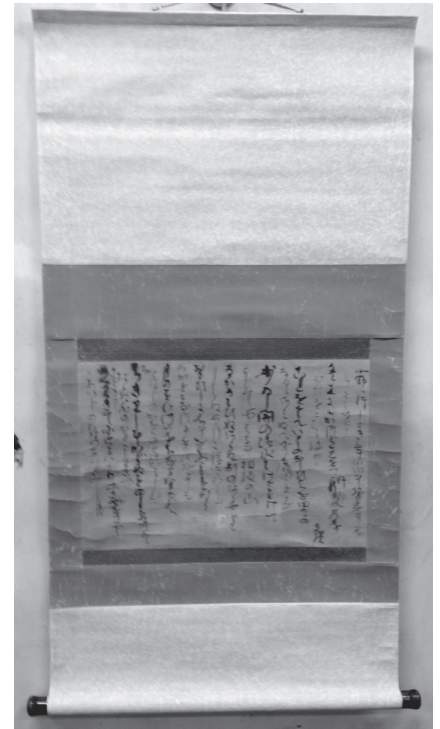
第三首：な(奈) かも□ひぬさ(佐) く□別のあ(阿) た(多) 世とも/しらぬや月に□こむらん

第四首：おもひしに(尔) 因に(耳) け(介) おもふよも□□から/は耳かとこな(奈) つ(徒) に(耳) をもと
(登) めしぞ

第五首：月のす(春) む河のをち(知) な(奈) る□な(那) れは/ (八) かつ(徒) らのかけ(遣) □のとけ
かゝるらん

第六首：ちきり(里) しに(耳) かは(八) らぬことの□□羅つ(徒) に(尔) て/たたぬ因のほ(本) とは(八)
しり(里) きや

第七首：めくり(里) きて小とるは(八) か(可) り(利) に(尔) さやけ(遣) きや/あは(八) し の嶋のあ
は(八) とみし月



〈立和田〉

日書3 はんざん ぎょうしよじく 蕃山 行書軸

クE188
軸装

① なかえとう
じゆ

(1608～1648)
江戸前期の儒学者。近江聖人と称された。1922年には藤樹神社が県社として設立。居宅の藤樹書院は神位や関係資料を現在に伝えている。

② はやしらざん
(1583～1657)
江戸初期の儒学者。江戸幕府の儒官を代表する林家の始祖。

本軸の筆者である熊沢蕃山（元和五年：1619～元禄四年：1692）は、江戸時代前期の儒者であり、名は伯継，字は了介，号は息游軒・不敢散人・不盈散人・有終庵主といった。一般に雅号のごとく用いられる蕃山は、彼が備前において蕃山（しげやま）村（岡山県備前市）に隠退した後、蕃山了介と称したことに由来する。蕃山は、中江藤樹^①に入門したが一家の生計をはかるため、半年ほどでそこを離れた。しかし、その後も深い学問的交渉は続けられた。慶安三年には、岡山藩主である池田光政に番頭三千石に抜擢されて信任を受け、その治績は治山・治水、承応三年の大洪水の災害や引き続き飢饉対策などに大きな成果を上げた。このころ、その名声は高く、幕府の重臣・諸侯ら、教えを請うものが殺到したという。しかし一方で「心学嫌い」の大老酒井忠勝や、蕃山の学を「耶蘇の変法」と評した林羅山^②など幕府の一部や池田家中にも批判する者もいた。

晩年は、参勤交代制などを批判したことで幕府の忌諱にふれ、幕命によって禁錮の身となり、幽居の生活を送った。73歳で没す。

蕃山の学は、一般に陽明学派に属するものとされており、彼の思想は陽明流の大虚思想で貫かれているが、これと朱子の大極一理との調和を求めて、独特の心法論を展開した。著書には、その哲学的思索を自由に展開した『集義和書』や独特の経世論を展開した『集義外書』『三輪物語』『夜会記』『大学或門』がある。

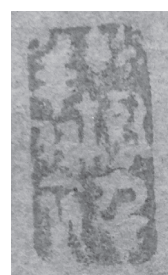
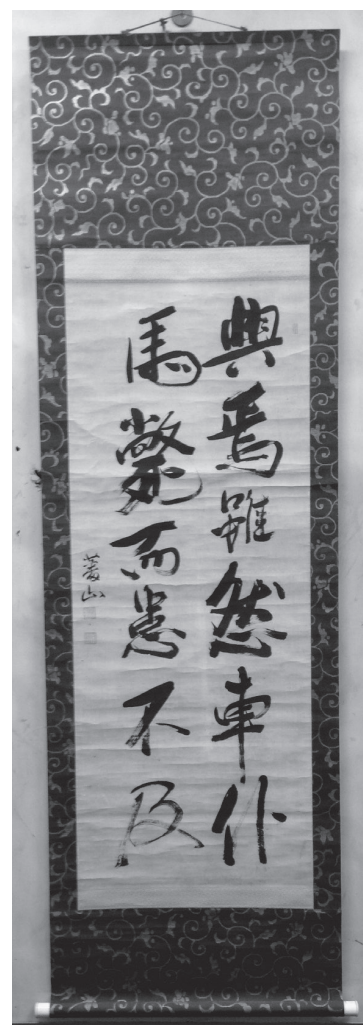
本軸の大きさは、縦194cm×横59cm（紙本部分縦122cm×横48cm）であり、引首印は「松樹千年翠」（2cm×1cm）、落款印は「伯継之印」「蕃山」（2.5cm×2.5cm）である。

釈文は以下の通りである。

「興焉雖怨車仆 馬斃而患不及 蕃山」

紙面に二行で堂々と揮毫された本作品は彼の生き様を想起させる。ゆるぎない信念を以て批判的思想を展開し、彼の名声が高いゆえ、多くの者から師事される一方で忌憚られることも少なくなかったようである。蕃山は後半生、京を去り、時には幕府に招かれ、出仕をすすめられるが固辞し、俗世間を離れ、隠棲して著作に没頭している。

本作品は、このように剛直な性格の蕃山の姿がうかがえる貴重な作品といえるであろう。



〈八谷〉

日書4 あんどうせいあん ぎょうそうしよじく 安東省庵 行草書軸

クE127

軸装

①まつながせき
ご

(1592~1657)

江戸時代前期の
儒者。俳人・歌
人である松永貞
徳の子。②きのしたじゅ
んあん

(1621~1692)

江戸時代前期の
儒学者。会津藩
の山崎闇斎・岡
山藩の熊沢蕃山
と並び称された。

③日書5参照。

④うつのみやと
んあん

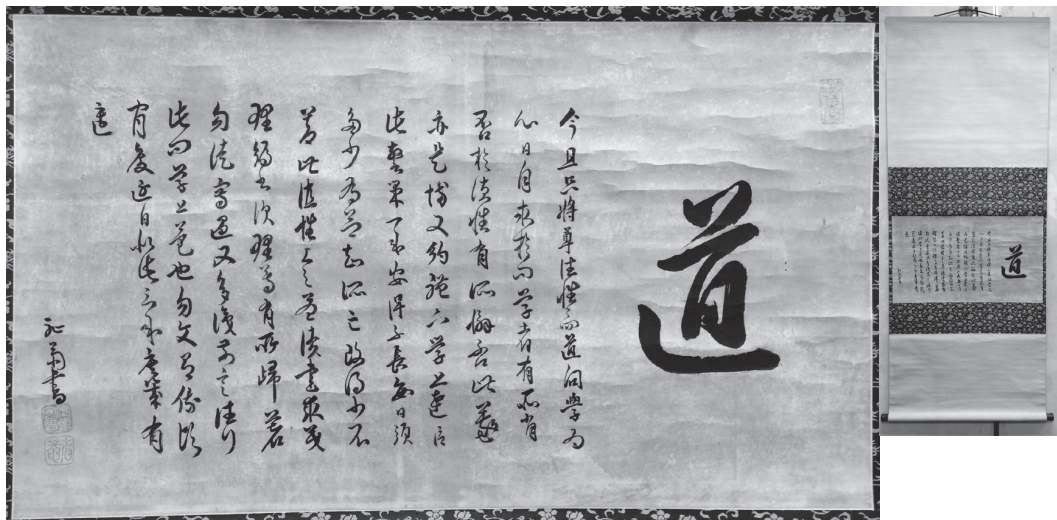
(1633~1707)

江戸時代前期の
儒学者。岩国藩
の文教に貢献。⑤しゅしゅんす
い

(1600~1682)

明末期の儒者。
浙江省余姚の人。
明朝の再興に尽
力したが成功せ
ず、1659年に
日本(長崎)に
亡命。当時の日
本の儒学界に正
式の礼儀作法を
伝える。⑥いとうとうが
い

(1670~1736)

江戸時代中期の
儒学者。伊藤仁
斎の子で、堀川
古義堂の第2代。

安東省庵(元和八年:1622~元禄十四年:1701)は、江戸時代中期の儒学者である。名は守約、字は魯黙、通称は市之進であり、省庵・恥斎と号した。柳川藩士である父:親清の次子で、筑後の人である。28歳の時に京都へ赴き、松永尺五^①の門下に入った。当時、同門には木下順庵^②・貝原益軒^③・宇都宮遯庵^④などの著名な儒生がいた。彼は1657年以後、朱舜水^⑤と運命的な出会いを果たす。その二人を紹介したのは、長崎で時折省庵を診療していた帰化人の唐医:陳(穎川)入徳であった。省庵は、朱舜水の学徳を慕い、子弟の礼を執り、また舜水も省庵を老友と称して尊び重んじた。舜水が徳川光圀に聘せられるまでの困窮の時期に、省庵はその俸禄の半ばを割いて贈り、その生活を助けた。また、伊藤東涯^⑥が省庵を「関西ノ巨儒」と称したことで、その名を知らない者はいなかったという。

書名である「恥斎」を名づけた理由に関しては、自分が50歳までに学問を為す道は全てが「恥」であることを痛感し、「恥斎」の文字によって、「恥を知る一端」とし、また「恥じることのない自己の実現」の思いで自分を戒めるためであったと記している。

本軸の大きさは、縦172.5cm×横68cm(紙本部分縦38cm×横65cm)であり、引首印は「齋菜窩」(3.5cm×1.6cm)、落款印は「安東守約」(2.2cm×2.1cm)「省菴」(2cm×2.1cm)である。

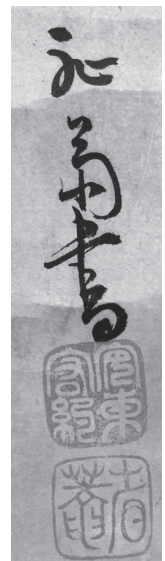
本文の内容に関しては、『近思録』の第二巻「為学」94が書されている。『近思録』とは、南宋の朱熹(朱子)が呂祖謙とともに、北宋の周敦頤(しゅうとんい)・程顥(ていこう)・程頤(ていいい)・張載の四人の言説の中からその精粹622条を選んで、編纂したもの。十四巻からなり、宋代儒学の要点を示した朱子学の重要な書である。

以下、積文を示す。

道 今且只将尊徳性而道問学為 心日自求於問学者有所背 否於徳性有所懈 否此義 亦是博文約礼下学上達信 此警策一年安得不長每日須(求)多少為 益知所亡改得少不 善此徳性上之益読書求義 理編書須理会有所帰著 勿徒写 過又多識前言往行 此問学上益也勿使有俄頃 間度逐日似此三年庶幾有 進 恥斎書

※ ()内は欠字。波線部は『近思録』において「信」は「以」、「問」は「閑」とある。
参考文献:徐興慶『異域知識人の出会い—朱舜水と安東省菴の思想異同試論—』(日本漢文研究(4)2009年)

〈八谷〉



日書5 ^{かいばらえきけん きょうと じいんかんす} 貝原益軒 京都寺院卷子

教育大
クE56S43
学芸大
クE42

①ほんぞう
本草学のこと。
中国で発達した
医薬に関する学
問。

②日書4「注」参
照。

③やまざき
あんさい
(1619~1682)

江戸時代前期の
儒学者、朱子学
者、神道家、思
想家。朱子学者
としては南学派
に属した。諱は
嘉、字は敬義、
通称は嘉右衛門。
号は闇斎。朱子
学一派である
崎門学の創始者。
神道の教説「垂
加神道」の創始
者。

④しゅうがい
しょう
中世日本にて出
された百科事典
のこと。

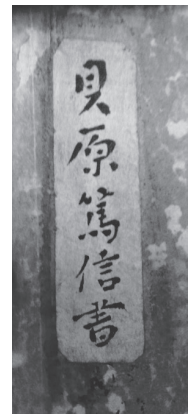
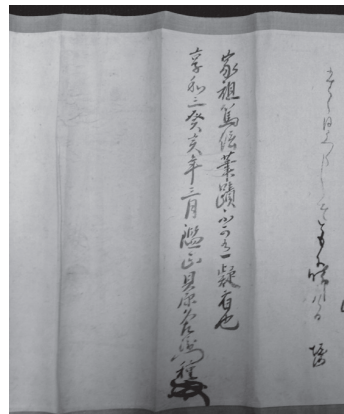
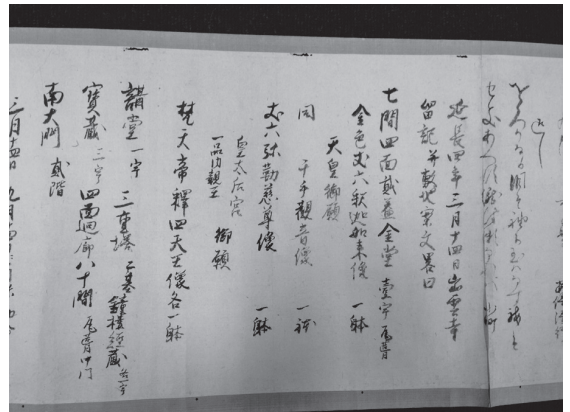
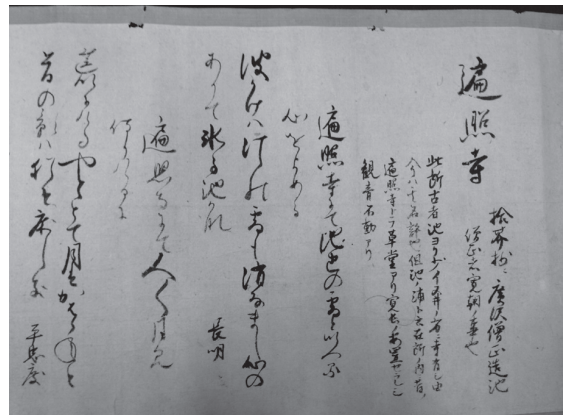
貝原益軒（寛永七年：1630～正徳四年：1714）は、江戸時代前期の儒学者、本草^①家、庶民教育家。筑前国福岡藩士。名は篤信、字は子誠、通称は助三郎。26歳で剃髪して柔斎と称すること十余年、結婚し蓄髪してのち、藩主より久兵衛（祖父の通称）を賜った。以後、損軒と号し、晩年致仕後に益軒と改めた。

慶安元年（1648）、18歳で福岡藩に仕えたが、同三年第二代藩主・黒田忠之の怒りに触れ、七年間の浪人生活を送ることとなる。27歳の時に第三代藩主・黒田光之に許され、藩医として帰藩。翌年、藩費による京都留学で本草学や朱子学等を学ぶ。このころ木下順庵^②、山崎闇斎^③らと交友を深める。

七年間の留学の後、35歳で帰藩し百五十石の知行を得て藩内での朱子学の講義や朝鮮通信使への対応を任され、また、佐賀藩との境界問題の解決に奔走するなど重責を担った。藩命により『黒田系譜』を編纂。また藩内をくまなく歩き回り『筑前国統風土記』を編纂する。

70歳で役を退き、著述業に専念する。著書は生涯に六十部二七〇余巻に及ぶ。主な著書は『大和本草』『系譜』『花譜』といった本草書。教育書では『養生訓』『和俗童子訓』『五常訓』。そして思想書の『大擬録』、紀行文の『和州巡覧記』がある。

本作品の大きさは、縦28cm×横558cm、紙面部分は縦25.5cm×横512.5cmである。落款印はなく、巻末に「家祖篤信筆蹟不可有疑有也／享和三癸亥年三月鑑正貝原久左衛門種（花押）」とある。この卷子には、京都の六つの寺院（遍照寺、大覚寺、上出雲寺、下出雲寺、平等院、極楽寺、法金剛院）について書かれている。その内容は多岐にわたり、各寺院について拾芥抄^④より引いた内容や、それぞれに深く関係している著名な俳句を書き記している。中には、和漢朗詠集の書き抜きなども記されている。益軒が京都に留学していた際に訪れたのであろうか。彼の書は、漢字と平仮名、片仮名を交えて巧みに書かれている。中でも鴨長明や平忠度の句などは、非常に流麗で美しい仮名の連綿が見られ、益軒の深い心得を彷彿とさせる。



〈曾我部〉

日書6 ほそいこうたくかんす 細井広沢 卷子

クE149
卷子

①きたじませつ
ざん
(1637~1697)
江戸時代前期の
書家・陽明学者。
黄檗僧などから
文徴明の書法を
学び、唐様の書
風の基礎を築い
た。

②日書7参照。

③ひらばやしあ
つのお
(1696~1753)
肥後熊本の人。
藩を辞して長崎
に移住後明の遺
民俞立德、黄檗
僧雪機・即非・
独立と交友し文
徴明、趙子昂を
正脈とする中国
の書を学び、独
自の新境地を開
いた。

④日書8参照。

⑤まつしたうせ
き
(1699~1779)
書は幼い頃より
佐々木玄龍につ
いて学んだ。酒
性を好み嵯(康)
阮(藉)の風を
慕い、放蕩な生
活をしていたが、
その門人は多い。

⑥唐宋五大の僧。

本所蔵品の筆者である細井広沢(万治元年：1658～享保20年：1735)は江戸時代中期の人で、名は知慎、字は公謹、通称は初め辻弁庵・山本藤次郎、後に次郎太夫と称した。号は広沢、別に玉川・思胎斎・菊叢・蕉林庵・奇勝堂などがある。遠江国(静岡県)掛川藩士の家に生まれ、11歳で江戸に出て坂井漸軒に朱子学を学び、儒臣として柳沢吉保や徳川光圀などに仕えた。兵学、劍槍射、拳法の武技、騎法、天文、測量の術も修めた多才人であり、学殖識見は当時抜きん出たという。

広沢は文徴明の書法(撥鐙法)を北島雪山①に習い、唐様書家として一世を風靡した。広沢は楷書・行書・草書の三体ばかりでなく、篆書・隸書もよくした。特に広沢の優れていた点は、書の歴史と理論に精通して唐様の根本原理を人々に紹介したことである。彼は54歳の時に『紫微字様』を著して、まず唐様の淵源をあきらかにし、62歳には『撥鐙真詮』を著し、唐様の書法が王羲之以来の正当的な筆法を伝えるものとして提唱した。さらに享保十年(1725)、『観鶯百譚(談)』を著し、名実ともに江戸唐様書道のオピニオンリーダーとしてその推進原動力となったのである。また、広沢は日本篆刻の先駆とされる初期江戸派の一人でもあり、門人には関思恭②・平林淳信③・三井親和④・松下烏石⑤などがいる。

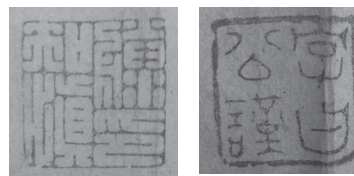
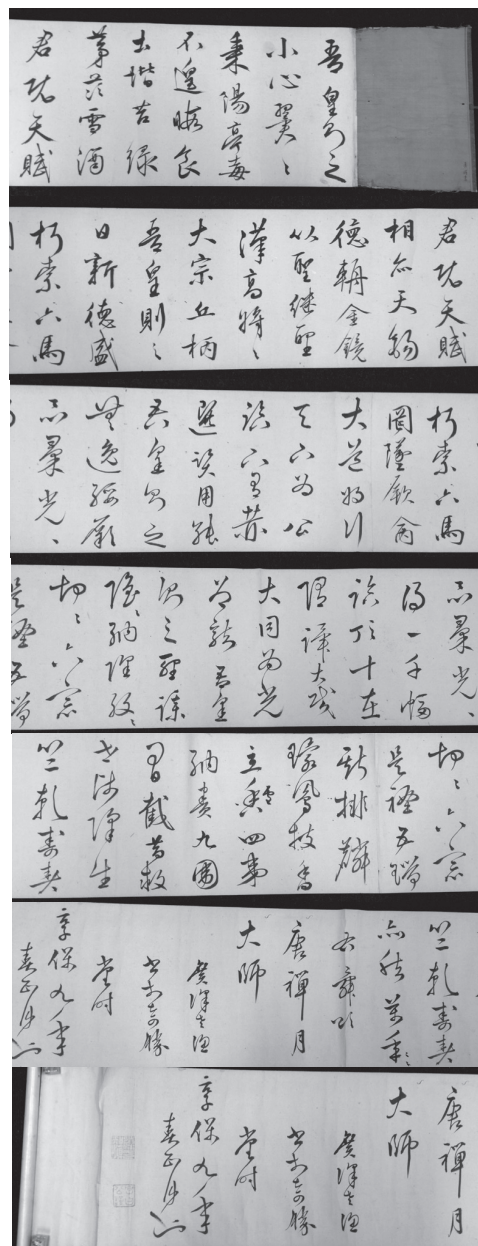
広沢の書は、強い筆勢と確かな筆法が生み出す高潔な書風であり、人格と学問の深さから生じるものを感じさせる。

本所蔵品全体の大きさ縦445cm×横28cm、紙面部分は縦411cm×横28cm。落款印は、「字曰公謹」(朱文)、回文で「藤知慎印」(白文)の二顆が押捺されている。

釈文は以下の通り。

吾皇則之	小心翼々	乘陽亭毒	不遑暇食		
土堦苔緑	茅茨雪滴	君既天賦	相亦天錫	徳翰金鏡	
以聖繼聖	漢高将々	大宗兵柄	吾皇則之	日新徳盛	
朽索六馬	罔蹙厥禽	大道将行	天下為公	臨下有赫	
選用用能	吾皇則之	無逸綏厥	品彙光々	得一千幅	
臨頂十在	隨蹕大哉	大同為光	為龍吾皇	則之聖謀	
隆々納隍	攷々切々	六宗是禋	五瑞斯排	麟環鳳披	香
立雪四夷	納贖九圍	有截昔救	世師降生	竺乾壽春	亦然萬年萬年
右舜頌	唐禪月	大師	廣澤老漁	書於奇勝	堂時 享保九年 春正月書

内容は貫休⑥の「大蜀皇帝寿春節進堯銘舜頌二首」の一部が書され、前半部は堯銘から、後半部は舜名からの詩が書かれている。 (長谷川)



日書7 関思恭 一行書

クE208

①ださいしゅん
だい

(1680~1747)

江戸時代中期の
儒学者・経世家。
「春台」は号で、
名は純、字は徳
夫、通称は弥右
衛門。

②日書6参照。

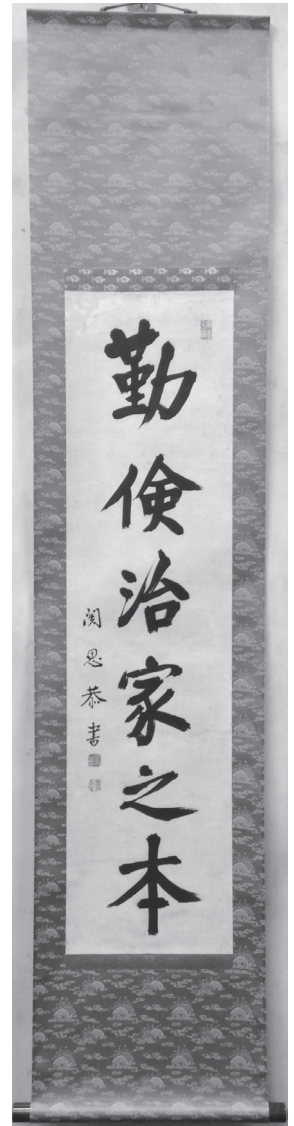
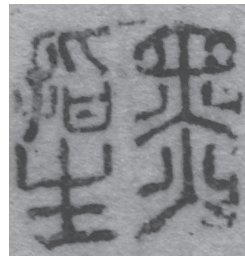
本軸の筆者である関思恭（元禄十年：1697～明和二年：1765）
本姓は伊藤氏、故あって関氏を称する。名は思恭，字を子肅，号
は鳳岡，また恭黙斎，通称は源内である。

幼少より英邁であり，学を太宰春台①に受け，書を細井広沢②
について学んだ。27歳で土浦侯に仕えたが，ほどなく致仕し，
小石川に塾を開いて子弟に書を教授した。のち御徒町に移った。

思恭は広沢門の秀才で，草書を得意とし，時に草聖と称せられ
た。その門生も多く，五千余人に及んだといわれる。65歳の頃
から神経痛を患い歩行が不自由となり，明和二年（1765）十二月
二十九日69歳で没した。小石川の称名寺に葬られた。その養子
其寧は，家業をつぎ，その子が克明で，克明の子が思亮，思亮の
子が雪江と，関氏五世は，江戸で書名を轟かせた。

本軸の积文は「勤儉治家之本」。

作品全体の大きさは，縦167cm×横36cmであり，紙面の部分
は，縦103cm×横26cmである。



落款印は「思恭之印」（1.8cm×1.8cm）とあり，その下に「墨指生」（1.8cm×1.8cm）が
押捺されている。なお，引首印は「楽善不倦」（2.9cm×1.7cm）である。

土浦藩の書家であった関家は，書の達人として知られ，なかには江戸で塾を開いて多くの
弟子を育てたり，文人らと交流したりした人もいたが，関思恭の書名は，広沢歿後，三井親
和と並称されますます高まった。浅草待乳山の歓喜天の堂に掲げられる『金龍山』の扁額
は，広沢の落款印があるものの，思恭が代筆したものといわれる。 〈高〉

日書8 みつ いしん な いちぎょうしよじく 三井親和 一行書軸

クE209
軸装

①東京都江東区の町名。または、旧東京市深川区の範囲を指す地域名である。旧深川区において、施設名や催し、町名の愛称などに「深川」の名を冠称する習慣が古今を通して色濃く残っている。

②日書6参照。

③日書7参照。

本所蔵品は江戸時代中期の書家・篆刻家である、三井親和（元禄十三年：1700～天明二年：1782）の書である。字は孺卿，通称孺兵衛，号は龍湖・深川漁夫・万玉亭。信濃国（長野県）の人で、のちに深川^①に住んだので深川親和ともいう。

親和の兄は深川の永代寺の僧で、細井広沢^②の弟子であった。親和は最初、禅僧東湖に書法を学び、12歳の時、広沢に就いて書と篆刻を学んだ。広沢没後は関思恭^③とともにその書名は高く、門人の中では最も広く知られていたうちの一人である。

親和は楷・行・草を巧妙に書く上、特に篆書に巧みであった。当時、親和が書いた篆書を反物に染めて着物や帯に使うことが流行し、「親和染」の名で江戸に流行したという。他にも彼は、神社の額や祭礼の幟、商家の看板、暖簾などにもさかんに揮毫し、世間でもてはやされていた。祭礼ではどの幟も親和の書であったため、「どの祭りにも深川の親父出る」という川柳が詠まれるほどであった。「深川の親父」とは、もちろん親和のことである。

また、彼は印譜なども多く収蔵し、「親和は広沢の深遠な刀法をただ一人受け継いだ」と評されたが、実際は正しい篆法を学んでいないので書体の用法に過ちが多いと指摘される。光沢の子である九皋は彼のことをあまり快く思っていなかったようで、親和の書風が先師の風と異なることや、文字に誤りが多いことを非難している。

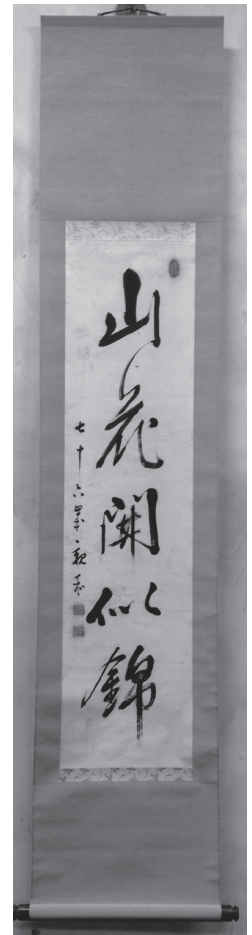
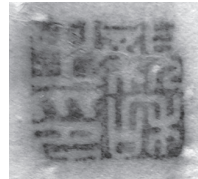
本所蔵品の全体の大きさは、縦173.5cm×横35.5cm、紙面部分は、縦103cm×横26cmである。積文は以下の通り。

「山花開似錦 七十六歳 親和」

落款印には「親和之印」（白文）、「孺卿」（朱文）の二顆、引首印には「事有憶」が押捺されている。なお、保存状態は非常に良好である。

本所蔵品が書された、親和76歳の時の別作が、右掲の篆書一行書である。落款の書きぶりは本所蔵品とほぼ同様である。しかし、本所蔵品の行書と篆書ではその風が大きく異なるのが窺えよう。世に大いにもてはやされた、親和書独自の造形性を備え、空間美を持ち、異彩を放つ。両作ともに、各書体を巧みに書くことのできた親和の高い技量や、絶妙な文字と空間処理を垣間見ることが出来るであろう。

〈長谷川〉



本所蔵品



篆書一行書「彈琴山月低」
転載：『書道全集23』平凡社

日書9 ちょうとうさい ぎょうそうしよじく 趙陶齋 行草書軸

クE-8

軸装

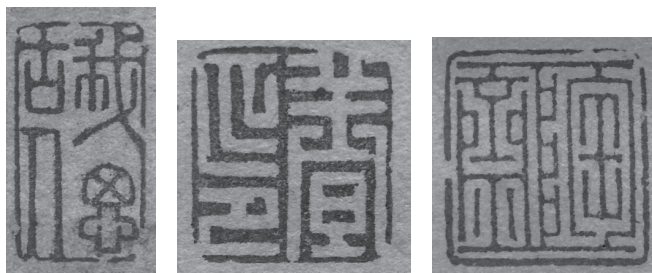
①さつま：旧国名の一。鹿児島県西部にあたる。薩州。

②おうう：陸奥（むつ）国と出羽国。現在の東北地方。

本所蔵品の筆者である趙陶齋（正徳三年：1713～天明六年：1786）は、江戸時代中期の書家である。名は養，字は仲頤，陶齋のほか息心居士，息心齋，枸杞園，清暉閣などの号がある。清国南京の商人趙氏が長崎にきて，丸山街の女との間で生まれた子といわれる。折しも華僧竺庵が長崎の興福寺にやってきた。そこで禅師は陶齋を佛弟子として養育した。享保十二年（1727）竺庵は宇治万福寺の堂頭となったので，また陶齋をつれて宇治黄檗にきた。陶齋は28歳まで僧籍にあったが，故あって還俗して，西は薩摩^①より東は奥羽^②に至るまで各地を遊歴し，江戸にあること十余年，大阪の深見久兵衛氏の家に移った，その後，堺に移り，能書家として知れわたり，教えを受けるものも多かった。また，丸薬を売って生計の一助にしていた。

趙陶齋は，書を最も得意とし，山水，篆刻にも長じた。また，文武の典故にも精通していた。天明六年に74歳で亡くなり，堺南宗本源院に葬られた。書ははじめ唐僧竺庵に書法を学び，のちに明の文徵明・元の趙孟頫，晩年には北宋の米芾の書を学んだ。陶齋は古人の書の臨書に努め，生涯の楽しみとし，当時陶齋の書を求める者は多くいた。

本軸の大きさは，縦186.9cm×横41.7cm（紙面部分縦108.5cm×横27.7cm）であり，引首印は「我思古人」（3.5cm×1.8cm），落款印は「養印」（2cm×2cm）「陶齋」（2cm×2cm）である。また，軸には「趙陶齋書」の題があり，「大正四年三月改装」，「心無罣礙□主人蔵」との記載がある。

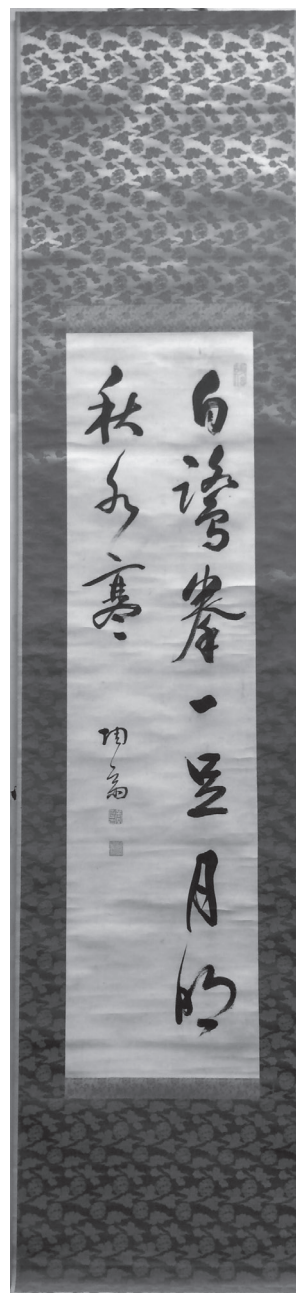


本文の内容に関しては，出典は唐代詩人：李白の『賦得白鷺送宋少府入三峽』からである。

詩の原文は「白鷺拳一足，月明秋水寒。人驚遠飛去，直向使君灘。」

書された詩の大意は「片足で立つ白い鷺，月は明るく秋の川の流れば冷たい」であり，宋県尉の赴任に際して作られた送別の宴の歌である。

〈高〉



日書 10 いけのたいが ばいし しちぜつそうしよ 池大雅 梅詩七絶草書

クE167

軸装

①てらいようせつ
(1640~1711)
江戸時代前期-中期の書家。名は辰、字は子真、別号は経堂、養拙齋。京都の人。佐々木志津磨に師事。

②よさぶそん
(1716~1783)
江戸中期の俳人、画家。本姓は、谷口、のち与謝氏。別号は宰鳥、夜半亭、画号、長庚、春星など。池大雅と「十便宜図」を合作するなど日本文人画を大成する。

③ひとみしょうか
(1887~1968)
日本画家。京都生、本名勇布(また進)。はじめ田中一華に入門し、また上田聴秋の書僕となる。京美工・京絵専卒。第三回文展で初入選、褒状受賞。日本南画院同人として同会に出品を続け、大東南宗院・平安書道会等にも参加。花鳥画を得意とし、また早くより池田雅研究を続けた。昭和四十三年(1968)歿。81才。

本軸の筆者：池大雅(享保八年：1723~安永五年：1776)は、江戸時代中期に京都で活躍した文人画家、能書家。本姓は池野、幼名は又次郎、のちに勤、無名などと改名。字は公敏、貨成、戴成などといった。号は大雅のほか、子井、為竜、葭庵、九霞、九霞山樵、竹居、玉梅、三岳道者などが多い。堂号は待買堂、大雅堂、袖亀堂などがある。

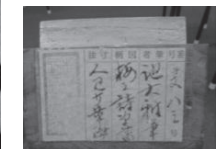
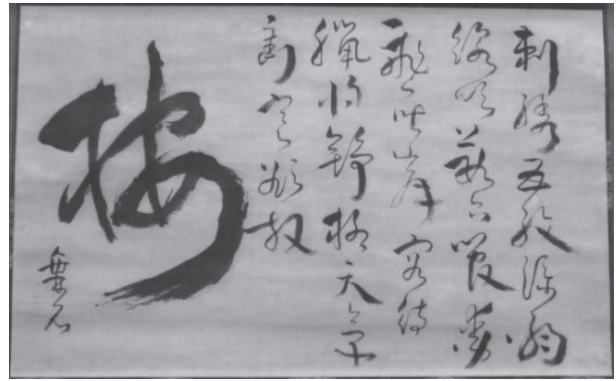
4歳の時父を失ったが、大雅の教育熱心な母の手によって育てられた。6歳の時に知恩院古門前袋町(京都東山区)の香月茅庵に漢文の素読を習い、さらに七歳の時に寺井養拙^①の流れを汲む清光院一井に唐様書の手ほどきを受けた。15歳のころになると、すでに画扇屋を構えて扇絵を描き、また篆刻を業として生計の足しにしていたという。26歳の時、富士山に上り江戸をへて日光より松島に遊んだのを手始めに、西は四国、九州にかけて全国を旅している。大雅の才能がもっともよく発揮されたのは画才で、その画才に磨きがかかったのは、20代であった。当時、中国より舶載された木版画譜を通し、明清の新しい画法の摂取に努めた。とりわけ南宗画の技法を独自に学び、さらに日本の伝統画や西洋画の画法も貪欲に取り入れ、やがて自由奔放で個性的な画風を確立した。与謝蕪村^②とともに「日本南画の祖」と称された。

書の方でも幼少のころより才覚を現した。7歳の時に黄檗山万福寺で大字を書し、「七歳の神童」とその能書ぶりを褒められたことが伝わる。幼少のころより来日した僧が多く住んでいた、万福寺にて、明清の書風に接する機会が多く、そこで唐様書を摂取し、独自の書風は、画で培われた自由な画風が書に反映されたもので、気力に満ちた格調の高い造形美を見せる。いずれにしても大雅の書は、画と書が渾然一体となって、まさに「書画一体」を体現した。江戸時代の書道史にひとときわ光彩を放つものである。

その代表作には「山水人物図襖絵」「五百羅漢図」といった品格の高い名作が数多く伝存する。

本軸の積文は以下の通り。刺繍五紋添弱／線吹葭六管動／飛灰岸容待／蠟将舒柳天氣／衝寒欲放／梅／無名 杜甫詩の「小至」という七言律詩を書き、最後の「梅」字を大書した作であるが、「動浮天」を「動飛灰」に、「山意衝」を「天氣衝」に書き換えている。

作品全体の大きさは、縦117cm×横64cm。紙面部分は縦32cm×横50cm。引首印は「(解説不能)」(2.5cm×2.5cm)、落款印は「霞樵」(2.3cm×1.1cm)が押捺されている。軸箱には(表面)①「池大雅梅詩七絶草書 横披」、(裏面)②「□句之梅一字大書款無名用萬曆裂装五枚如光・辛丑春三月下浣少華自題匣蓋併識」、(側面)③「大雅堂梅之七絶」④「池大雅筆梅之詩草書人見少華^③函」と記載がある。



①

②

③

④

〈高〉

日書 11 かとうちかげ わ かしよじく 加藤千蔭 和歌書軸

クE47
軸装

①たちばなのもろえ

(684~757)

奈良時代の高級官人、政治家。『万葉集』に数種の歌を残す。

②のういん

(988~?)

平安時代中期の歌人。

③かものまぶち

江戸中期の国学者、歌人。『万葉集』『古事記』などの古代の古典の研究に主力を注ぐ。

④むらたはるみ

(1746~1811)

歌人で国文学者。『琴後集』『仮名拾要』『字鏡考証』などを著し、仮名遣いの研究に優れていた。和様書の名手。

⑤江戸時代に活躍した真言宗の学僧・松花堂昭乗の上代様の書風で滝本流、男山流、式部卿流ともいう。

⑥後世、藤原時代の書風を上代様という。小野道風や藤原行成の書跡は上代様の典型である。

本軸は加藤千蔭（享保二十年：1735～文化五年：1808）の書である。江戸末期の国学者（国文学者）、歌人として名高い。幼名は佐芳、字は徳与磨。本姓は橘で、橘千蔭とも称した。号には芳宜園・朮園・逸楽・耳梨山人などがある。『万葉集』と関係の深かった橘諸兄^①や歌僧能因^②の出した橘氏の後裔で、父（枝直）は古典に造詣が深く、歌人としても知られた人物で賀茂真淵^③の門人であった。千蔭は、父（枝直）に和歌の手ほどきを受け、後に真淵に直接師事をして、歌人として一家を成したが、54歳まで役人生活を過ごし、後に著述に専念する。三十巻に及ぶ大著『万葉集略解』は彼の代表作として知られている。

千蔭は特に作歌に秀で、村田春海^④と並んで江戸期の双壁と称される。歌風は平安朝風を主とし、当時の趣味もおりまぜて、典雅流麗な情趣に特色があり、堂上の貴顕から花街にまで、名を知られたという。絵画や狂歌にも優れ、書道においても千蔭流として一家を成した。

本軸全体の大きさは、縦96cm×横53.5cm、紙面部分は縦32cm×横41cmである。積文は以下の通り。

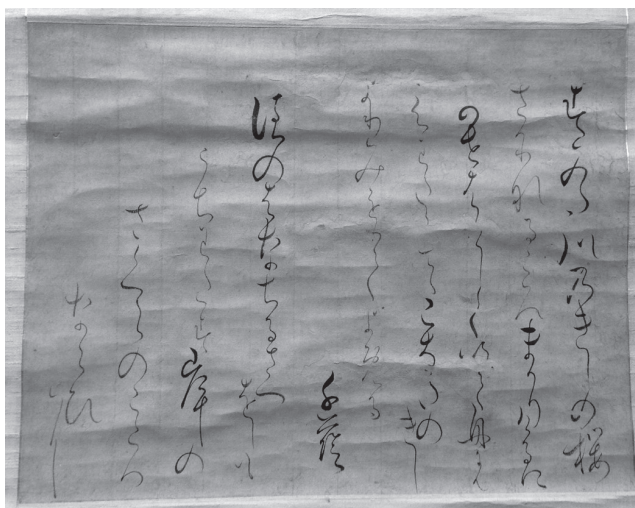
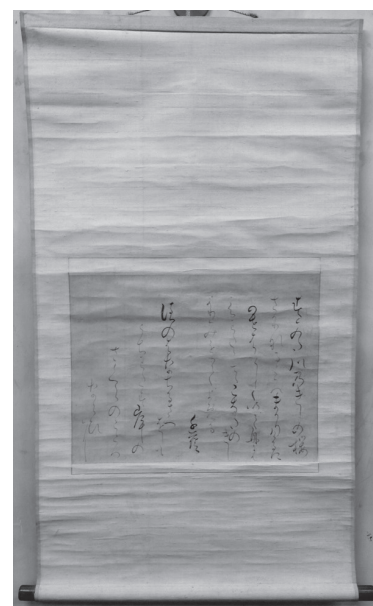
す(春)みだ(多)川の(乃)き
しの桜 さか(可)り(利)な(那)
るころまか(可)りけ(介)るに
かぜ(世)は(者)け(介)しく吹
て(天)舟に(尔)も(无)えわ
(王)た(多)りてこなた(多)の
きしより(利)みをりてよめ(免)
る 千蔭

酒の者(は)なちるさへをして う
ち王(わ)た(多)す(春)岸の
さくらのこころ ならひに(耳)

千蔭は書においては、はじめ松花

堂流^⑤を学んだようで、後に上代様^⑥の書に直接私淑し、独自の書風を形成した。迫力が弱く、きれいごとにと終わった感のある書風であるとの後世の指摘も目立つが、当時の国学者の中では本格的に書道に打ちこんだただ一人の人であったといってよい。本作も漢字仮名ともに上代様の趣が感じられ、終始流麗な運筆で独特の世界観がある。また、本作に出てくる「隅田川」であるが、隅田川七福神のある墨東（隅田川の東岸）の向島あたりは、当時の一流の文人墨客である亀田鵬斎、村田春海、加藤千蔭等にも広く愛された所である。向島白髪神社境内には、千蔭の石碑が現存している。

千蔭を祖とする「千蔭流」は、妙法院宮真仁法親王や富小路貞直などの堂上方を始め、俳優・遊女など幅広い層に支持を得た。わかりやすく、習いやすいという面からも、明治期まで命脈を保ち続け、樋口一葉も千蔭流の書を自家葉籠中のものにしていく。〈長谷川〉



日書 12 菅茶山 行書二行幅

かんちゃざん ぎょうしよ に ぎょうふく

クE4001
軸装

①なばろどう
(1727~1789)
江戸時代中期の
儒学者。古学を
学び、のちに朱
子学に転じた。
阿波侯の儒官と
なり「四国の正
学」と称された。

②らいさんよう
(1780~1832)
江戸時代後期の
歴史家、思想家、
漢詩人、文人。

③ほうじょうか
てい
(1780~1823)
江戸時代の漢
学者。文化十
年(1813)に茶
山の門人となり、
「廉塾」の監督
を委任され、や
がて茶山の姪敬
を娶った。

④あべまさきよ
(1775~1826)
江戸時代後期の
大名。備後福山
藩の第五代藩主。
江戸幕府の幕閣
で老中を務めた。

菅茶山(寛延元年:1748~文政十年:1827)は、江戸時代後期の儒者、詩人であり、名は晋帥、字は礼卿、通称は太中、茶山と号した。

備後国神辺(広島県深安郡神辺町)に生まれ、父久助は、農業と酒造業を営んでいた。茶山が生まれ育った神辺は、山陽道の宿場町として栄えていたが、賭博や飲酒などで乱れていた。学問を広めることにより、町を変革しようと考えた茶山は、明和三年(1766)19歳で京都に上り、古文辞学を学び、のち那波魯堂^①に朱子学を学んだ。その後、神辺に天明元年(1781)ごろ私塾「黄葉夕陽村舎」を開き、寛政八年(1796)から福山藩の郷校として認められ、「廉塾」と称し、生涯この塾の経営と発展に任じた。

茶山は、化政文化の代表的な詩人として知られ、山陽道を往来する文人の多くが「廉塾」を訪ねたという。「廉塾」の門人には、頼山陽^②・北条霞亭^③などがいる。

山陽の父春水と伯父杏坪は、ともに芸藩に仕えた儒者で、早くから茶山と親交があった。茶山と山陽が初めて出会ったのは、茶山41歳、山陽9歳のときである。厳島を見物するために、福山、尾道、西条等を経て、広島春水の邸宅を訪ねた。行儀正しく、勉学に勤しんでいた山陽を見て、感銘を受けたことを『遊藝記』という旅日記に記している。

山陽は21歳のとき脱藩騒動を起こし、座敷牢での幽閉生活を余儀なくされた。謹慎が解けた山陽の身の振り方に心を痛めている春水を見かねた茶山は、「廉塾」の都講を務めさせる。しかし一年余りで京都へ出奔してしまうが、その後も二人の関係は続いた。

また、藩主阿部正精^④に厚遇され、享和元年(1801)福山藩の儒官に准じられ、文化六年(1809)正精の命により『福山志料』を編集した。

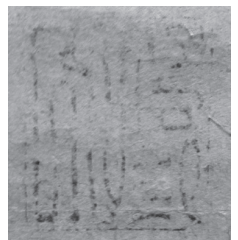
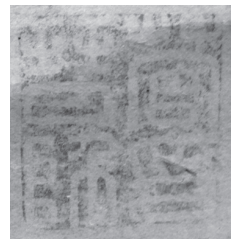
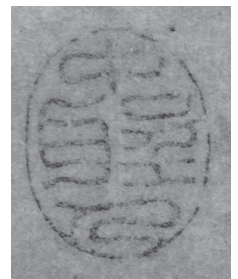
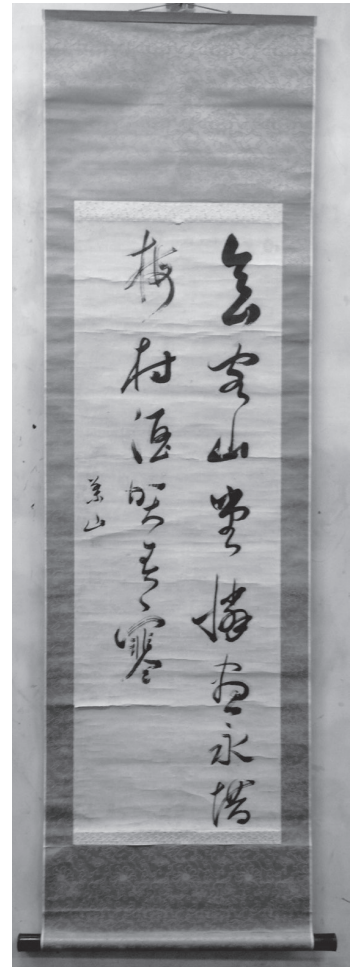
著書には『黄葉夕陽村舎詩(初編・後編・遺稿)』のほか、随筆集『筆のすさび』『冬日影』などがある。

晩年には全国に詩名が高かったが、80歳で神辺にて没した。

本軸は、縦196cm×横57cm、紙面部分は縦129cm×横44cmで、積文は以下の通りである。

念客山堂憐盡永惜／梅村酒賀春寒／茶山

引首印は3cm×2.5cm「中聖人」、落款印は2.7cm×2.7cm「菅晋帥印(白文)」と「禮卿氏(朱文)」が押捺されている。〈豊〉



日書 13 おおたしよくさんじん はいく いっしゆ 太田蜀山人 俳句一首

クE190
軸装

①うちやまが
てい

(1721~1788)

江戸時代の狂歌師。江戸牛込加賀町に住した幕臣で、近隣の子弟に国学・歌学を教えた。

②まつぎさかん
かい

(1725~1775)

江戸時代後期の儒学者・漢詩人。徂徠学派として重をなした。

③ひらがげんない

(1728~1780)

江戸時代中期に活躍した本草学者、地質学者、蘭学者、医者、殖産事業家、戯作者、浄瑠璃作者、俳人、蘭画家、発明家。天才、または異才の人と称され、多彩な分野で活躍した。

④へづつとうさく

(1726~1789)

江戸時代後期の戯作者、狂歌人、漢詩人、文人。

太田蜀山人（寛延二年：1749～文政六年：1823）は、江戸時代中期の幕臣であり、文人、学者である。名は覃，字は子耜，蜀山人・南畝四方赤良などの号がある。江戸牛込仲御徒士町に生まれ，15歳で内山賀邸^①に入門し，18歳頃に松崎観海^②に師事した。

19歳で作った狂詩文を平賀源内^③や平秩東作^④にすすめられ『寝惚先生文集』と題して出版し，一躍文名をあげて以来，江戸の新興の文芸会に活躍することとなった。特に明和末ごろ友人の幕臣唐衣橋洲と狂歌を始めると，天性の機知と諧謔の才を発揮して次第に同好者が集まり，天明に入ると爆発的な流行が起こって，その中心の座を占めた。

安永年中（1772～1781）には『甲駅新話』『変通軽井茶話』など洒落本の佳作を「風鈴火山」「山手馬鹿人」といった仮号で書き，天明に入ると黄表紙にも筆を染め，文芸会の総帥の観があった。しかし，天明末に田沼政権が崩壊して松平定信の新政が始まると，いち早く二十年に及ぶ文筆活動を廃した。その後は，御徒の勤務の傍ら研学に励み，寛政六年（1794）学問吟味に首席で及第し，二年後に支配勘定に昇進して『孝義録』の編纂，勘定所古記録の取調などに従事した。さらに享和元年（1801）には大坂銅座，文化元年（1804）には長崎奉行所に各一年出役し，同五年には玉川水防の巡視など，幕吏としてもきわめて有能であった。

寛政の改革の緊張が享和ごろから次第に緩和し，乞われるままに蜀山人という仮号を用いて狂歌をよみ始めた。狂歌のみならず，漢詩文も当代一流とされ，江戸の代表的な文人として後世に影響を与えた。70歳を超えても支配勘定の職にあったが，ついに五目見以上に昇進できず，文政六年（1823）四月六日，75歳で没する。

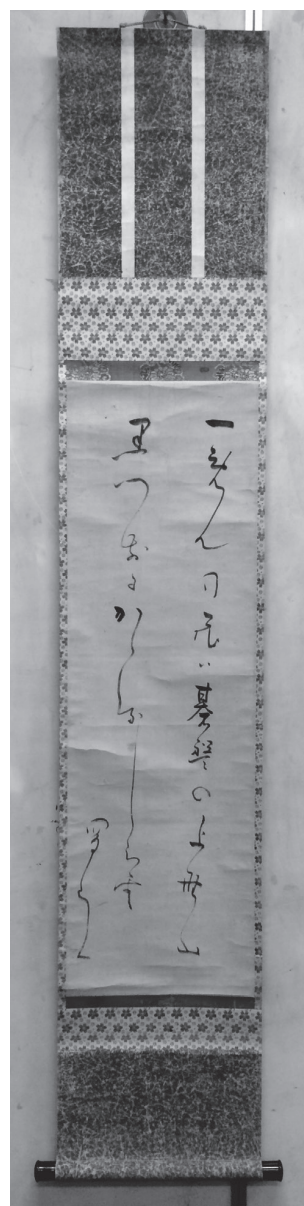
書は草書，仮名をよくし，飄々とした味わいのある筆跡を残しているが，その根底は唐様である。張瑞図の風があり，求める者が非常に多かったため，門人の岡田文宝亭に代筆せしめたものが多いといわれる。

本軸は，縦169cm×横29.1cm（紙面縦92.2cm×横27.1cm）であり，積文は以下の通りである。

一め（免）んの（乃）花は（八）碁盤の上野山
黒門前に（尔）かゝる（流）しら雲
蜀山人

東京都台東区の上野公園内にこの歌を刻した石碑があり，歌のあとに蜀山人の説明が続く。これによると碑の文字は蜀山人の自筆であるという。江戸時代，上野は桜の名所であった。昭和十三年（1938），公園内で茶亭を営む七條愷翁のよって寛永寺総門の黒門跡にその黒門と桜を詠んだ蜀山人の句を刻み，碑が建立された。

〈豊〉



日書 14 こがせいり しめんせんめんず 古賀精里 使面扇面図

クE207

軸装

①柴野栗山，尾藤二洲，古賀精里のこと。「寛政の三助」ともいう。

②ふくいしょうしゃ (?~1801)

福井敬斎のこと。江戸中-後期の医師。

③にしよりせいさい (1702~1797)

江戸中期の儒者。

④びとうじしゅう (1747~1813)

江戸中-後期の儒学者。

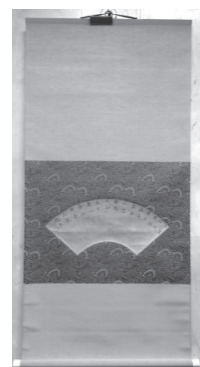
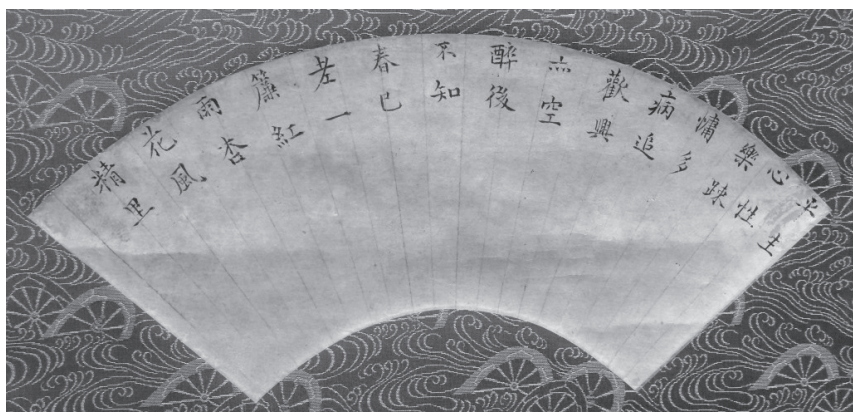
⑤らいしゅんすい (1746~1816)

江戸後期の儒者，漢詩人。頼山陽の父。

⑥昌平坂学問所のこと。江戸幕府直轄の教育機関。林家に依拠した教育体制を改め，制定したもの。

⑦はやしだいがくのかみ (1800~1859)

江戸後期の幕府の儒官。1853年本家相続より大学頭を名乗り，復斎と号した。



古賀精里（寛延三年：1750～文化十四年：1817）は，江戸時代後期の儒者であり，寛政三博士^①の一人である。肥前国佐賀郡古賀村（佐賀市）の生まれで，諱は樸（すなお），字は淳風，弥助と称し，号は精里である。古賀氏の本姓は劉，帰化人の後裔である。

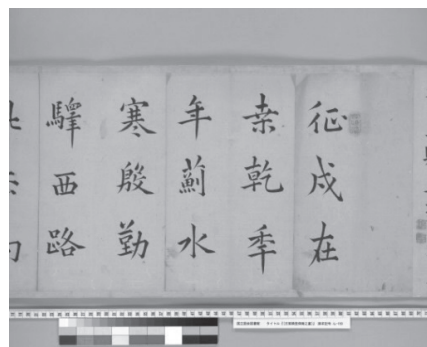
はじめ陽明学を好んだが，京都に遊学し，福井小車^②・西依成斎^③に学んでから朱子学を主とした。大阪滞在中に，尾藤二洲^④・頼春水^⑤と親交があった。寛政三年には幕命により江戸昌平覺^⑥にて論書を講じ，八年には幕府の儒者に任ぜられた。文化七年，対馬に赴き対韓交渉にあたり，翌年も林大学頭^⑦とともに韓使と折衝した。68歳で没す。

本軸の大きさは，縦 131.5cm×横 63.2cm（紙本部分縦 16.8cm×横：最長 48cm，最短 22.5cm）であり，落款印は上：1.7cm×1.5cm，下：1.5cm×1.5cm であり，内容に関しては，不鮮明で判読することができない。積文に関しては以下の通りである。

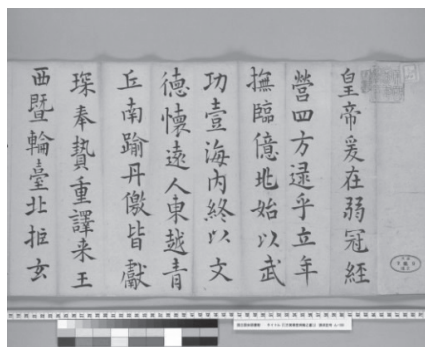
「平生 心性 楽疎 慵多 病追 歡興 亦空 醉後 不知 春已 老一 簾紅 雨杏 花風 精里」

『国立国会図書館デジタルコレクション』において，精里と第三子の侗庵の書が拝見できる。この書は，前半に精里の九成宮醴泉銘の臨書があり，後半は侗庵によって，李益の「幽州」，柳宗元の「入黄溪聞猿」（部分），張仲素の「思君恩」，賈島の「劍客」が書されている。前半の引首印は「精里」，落款印は「古賀樸」「」。後半の引首印は「堂」，落款印は「古賀煜」「啍卿氏」「愛月堂」である。

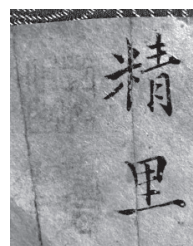
精里は蘭亭帖の跋において，「書は晋唐を学ぶべきであるが，法帖のよいものがえられないから，米芾・趙子昂・董其昌というような後世のものから入って，その精神をつかむことが大切である」といった内容のことばを残しているようである。彼はよく董其昌を学んだようであるが，本作品やこの臨書からも彼の書学の熱心さがうかがえる。



(後半部)



(前半部)



日書 15 かめ た ほうさい たけいし が しじく
 亀田鵬斎 竹石画詩軸

クE3007
 ク-005

7153007

軸装

①いのうえきん
 が

(1732~1784)

江戸中期の儒学者、江戸の人。名は立元。別号、考槃翁、柳塘閑人。仁斎学、徂徠学、朱子学などを兼学、のち独立していわゆる折衷学を唱えた。訓詁は漢唐、義理は宋明、詩文は唐宋諸家に拠った。

②かんせいいがく
 のきん：1790年、寛政の改革の一環として、江戸幕府が昌平坂学問所に対し、朱子学以外を異学とし、その教授を禁止したこと。

③日書8参照。

④まきりょうこ
 (1777~1843)

江戸後期の書家。越後の人、本姓池田、名は大任、字は致遠、歐陽詢など主に唐の書を学び独自書体で一家を成した。著「十体源流」。

亀田鵬斎（宝暦二年：1752～文政九年：1826）は江戸時代の儒学者である。出生地は江戸神田弁慶橋（東京千代田区）。幼名は弥吉、初名は翼、後に長興、字は凶南、後に公竜、釋龍と改めた。通称は文左衛門。号は鵬斎のほか、風顛生、太平醉民、朽木居士などがある。堂号は善身堂で上野国（群馬県）の人。

鵬斎は、14歳で新進気鋭の折衷学者井上金峨^①に入門し、折衷学の儒者として一家をなした。23歳の頃から家塾を開いて子弟の教育にあたり、34歳の時に駿河台に移して育英堂と称した。門弟も多数にのぼり、江戸下町の学者として好評であった。しかし、寛政異学の禁^②によって閉塾を余儀なくされ、その後は詩・書・画と文酒の間に遊ぶ放浪の隠士となった。

書は6歳頃から三井親和^③に習った。越後の旅から帰ってきた鵬斎は、良寛の影響を受けて、「蚯蚓書き」と呼ばれるくねくねした字を書くようになったという。鵬斎の蚯蚓体が良寛の影響によるものかは、その真偽のほどは不明である。確かに鵬斎の行草書には時として、みみずばりに蛇行する線が見えるが、むしろ元々鵬斎が張旭や懷素の狂草体を学んで得た成果と見るべきである。

鵬斎の門弟の一人には、「幕末の三筆」に数えられた巻菱湖^④もいる。門下生の多くは師風に酷似するのが常であったが、菱湖の才能を見極めた鵬斎は、自分に似ることを禁じて古典を学ばせたといわれる。

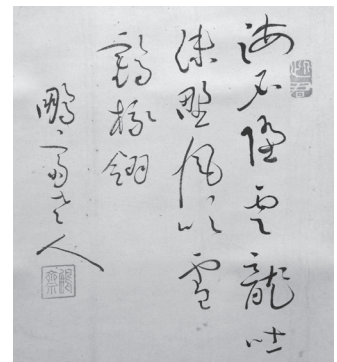
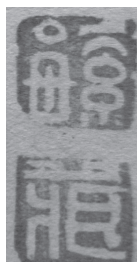
本所蔵品全体の大きさは、縦206cm×横42cm、紙面部分は縦136.5cm×横31cmである。本作は画と画賛の筆者は別であり、画は、□□老人によるものである。

画賛の引首印は「□□」（3cm×1.7cm）、落款印は「鵬斎」（2.5cm×2.5cm）、画の落款印は「□□」（1cm×1cm 白文）が押捺されている。

釈文は以下の通り。

「海石墮雲龍吐 沫／野風吹雪 鶴椽翎／鵬斎老人」

〈高〉



日書 16 かいおくせんせい いちぎょうしよじく
海屋先生 一行書軸

ク E46

軸装

①武家故実 (弓馬故実), 弓術, 馬術, 礼法の流派。

②なかいちくざん

(享保十五年 - 享和四年・文化元年)

(1730~1804)

儒学者。名は積善, 字は子慶, 通称善太, 竹山は号。父の死とともに懐徳堂預人の地位を引き継ぎ, その後学主となり, 以後没するまで同校の発展のため心血を注いだ。

③いちかわべいあん

(安永八年 - 安政五年)

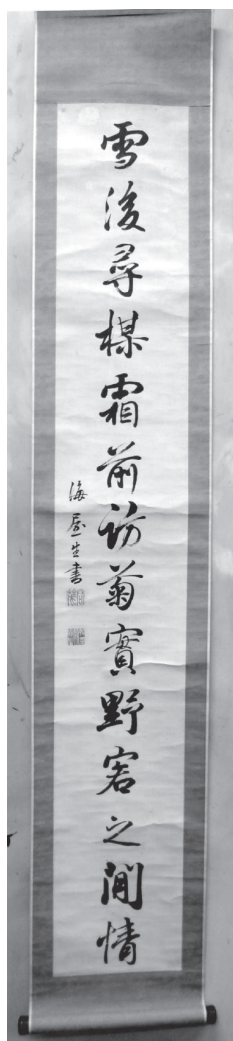
(1779~1858)

日書 18 参照。

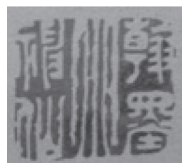
まきりょうこ

(1777~1843)

名は大任, 字は致遠・起巖。号は菱湖・弘齋。19歳の時江戸に出て亀田鵬齋に師事し, 詩学・書を学ぶ。古今の墨帖を臨し, 仮名を能くし優雅清楚な書風の一派を立てた。



落款印



箱書き(表)



箱書き(裏)

本軸は江戸時代後期の儒学者, 書家, 文人画家である貫名海屋 (安永七年: 1778 ~ 文久三年: 1863) の書である。名は直知・直友・苞。字は子善・君茂。号は初めに海仙, ついで海客・海屋・海叟と改め, 71歳頃より萩翁・摘萩翁・萩叟を用いた。別号に鴨干漁父・方竹山人・須静堂主人・三緘堂主人・拾翠野客などがある。御弓町 (今の徳島市弓町) の人で, 吉井直好の次男として生まれ, 27歳の時, 遠の祖である貫名氏に改めた。吉井家は初代の祖父直房の時代から阿波藩主蜂須賀家に小笠原流^①の礼方として仕えた家柄で, 幼少期より漢籍・書・画に専念した。17歳の頃, 叔父の霊瑞を頼って高野山に登り, そこで空海の真跡を披見して書法に心酔したといわれる。22歳の頃には, 中井竹山^②に就いて懐徳堂で儒学を修め, 後に市井の儒者として京都に私塾・須静堂を開き, 晩年は京都岡崎, さらに下鴨に移り, 賀茂御祖神社に奉仕した。

70歳の時『皇都書画人名録』に書家・儒教者・詩人としての名が挙げられ, 75歳の時には『鑒禪画適』に画人の名家として載せられたことにより, この頃から詩・書・画をよくする文人として広く認められるようになる。「江戸の米庵, 上方の海屋」といわれ, 彼に対する後世の評価は高く, 市河米庵, 巻菱湖とともに「幕末の三筆」^③と称されている。

本軸の大きさは, 全体縦 160cm × 横 27.2cm, 紙面部分は縦 136cm × 横 22cm。表に「海屋先生書 一行 一」, 裏に「昭和二年四月改箱 望稼軒」との記載がされた箱に収められており, 保存状態は良好である。また, 「雪後尋 萩翁」と書かれた紙が作品に添えられている。作品の釈文は, 雪後尋 萩翁 (実) 野客之間 (間) 情 海屋生書

落款印には 2.5 × 2.5cm, 「君茂」(朱文) 「翰墨小神仙」(白文) の二顆が押捺されている。本作に使用されている「海屋生」の号は 60歳から 70歳ころまで特に多用されているものであり, 書は, 流麗で伸びのある書風が特徴的である。また, 題記に海屋先生一行書「一」と表記されていることから, 続作が存在し, セットで所蔵されていたと推測される。

貫名萩翁の書風は, 晋唐の精拓を克明に学び, さらに日本の古名跡を加味することによって独自の高雅な書風を大成したとされている。彼は中国の碑版法帖の佳拓を多数収蔵し, その上鑑識にも長じていた。唐碑の原拓本による臨書や, 晋唐の遺法を伝えた日本の平安時代の筆跡に注目し, たゆまざる臨書の努力によってその書風を確立したのである。我が国の古い名蹟の価値を見出して, それを唐様の中に折衷することに成功した稀有の人物であり, 後世に与えた影響は極めて大きい。

貫名萩翁の書風は, 晋唐の精拓を克明に学び, さらに日本の古名跡を加味することによって独自の高雅な書風を大成したとされている。

彼は中国の碑版法帖の佳拓を多数収蔵し, その上鑑識にも長じていた。唐碑の原拓本による臨書や, 晋唐の遺法を伝えた日本の平安時代の筆跡に注目し, たゆまざる臨書の努力によってその書風を確立したのである。我が国の古い名蹟の価値を見出して, それを唐様の中に折衷することに成功した稀有の人物であり, 後世に与えた影響は極めて大きい。

〈長谷川〉

日書 17 すうおう らんきょう し がく 菘翁 嵐挾詩額

クE81
額装

①唐以後に書聖と仰がれた。子の王献之とともに二王と称され、楷、行、草を完成させる。

②唐の三大家。二王を典型としながら、清新で均齊のとれた楷書の名品をそれぞれ生み出す。

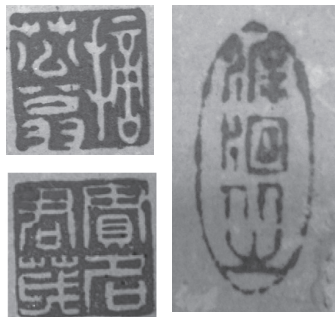
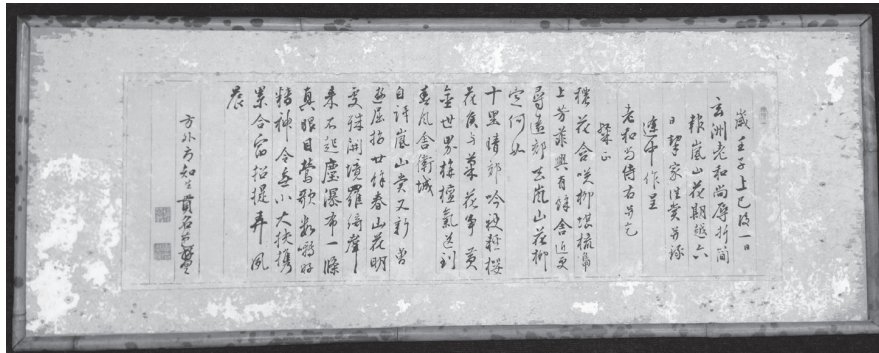
③乱世を生き、書にはその剛直な精神が反映され、顔法といわれる新しい書風を作り上げた。

④一気呵成に書き上げる狂草をよくした。顔真卿とともに王羲之以後の書の革新派といわれる。

⑤三筆の一人。王羲之と顔真卿の書から独自の書風を確立した。

⑥三蹟の一人。王羲之の書を基にしながら、和様の書を完成させた。

⑦日書 28 参照。



本軸は貫名菘翁の書である。人物については、日書 16 を参照して頂きたい。

「菘翁嵐挾詩額」と書かれた木箱に収められており、作品全体の大きさは縦 42.5cm×横 111cm、紙面部分は縦 27.5cm×横 85cm の額である。

本作の釈文は、

「歳壬子上巳後一日 / 玄洲老和尚辱折簡 / 報嵐山花期越六 / 日挈家誰賞并録 / 途中作呈 / 老和尚侍右并乞 / 祭正 / 禮花含咲柳堪梳 / 上芳菲興有餘 (余) 舍近更 / 尋遠郊去嵐山花柳 / 定如何 / 十里晴郊吟袂輕櫻 (桜) / 花侯与菊花争黄 / 金世界梅檀氣 (氣) 送到 / 春風舍衛城 / 自評嵐山賞又新首 / 遊屈指廿餘 (余) 春山花明 / 處殊開境羅綺羣 (群) / 来石起塵瀑布一條 / 真眼鶯 (鶯) 歌数轉好 / 精神令無小大扶携 / 累合宿招提弄夙 / 晨 方外辱知生 貫名苞梓具」である。

落款印は白文で 2.5cm×2.5cm の「菘翁」「貫名君茂」の二顆、引首印は朱文 2.5cm×1.1cm で「遡洄從之」が押捺されている。

菘翁の書には小字のものにも優れたものが多いとされている。本作を見ても、小ぶりながら側筆を用いた変化に富んだ線、独特の文字造形が見られ、高雅な雰囲気醸し出す優品である。

菘翁は多くの碑版法帖を取蔵していたとされるが、その品目は彼が晩年、京都の下賀茂神社献納した蔵書の自筆目録である奉獻帖によって知ることが出来る。これによると、虞世南の孔子廟堂碑や龍藏寺碑等多くの唐碑帖があり、このように唐碑の原石拓本を重んじたことは、今までの粗末な石摺の法帖にとらわれていた陋習を一掃するものであった。彼の鑑識の高さと臨模の苦心には敬服すべきものがある。王羲之^①、虞世南、欧陽詢、褚遂良^②、顔真卿^③、懷素^④、空海^⑤、小野道風^⑥等、多方面にわたり書を学んでいる所に、彼の書が年を追って磨きがかけていったことが理解できよう。

江戸期の書が停滞する中、唐様書道を牽引することとなった菘翁の学書法やその活躍は、次代である明治期の国書法との直接交流の素地を醸成することとなった。明治以降、日下部鳴鶴^⑦らが推賞して書家としての評価が高まることとなり、我国の書の発展においての彼の業績は図りしれないものがある。
〈長谷川〉

日書 18 市河米庵 四行書幅

いちかわべいあん しぎょうしよふく

ク005-3011
(平成4年)
S-93
軸装

①はやしじゅっ
さい

(1768~1841)

幕府の文書行政
の中樞を担った
人物。その学問
の基盤は朱子学
にあったが、清
朝の考証学にも
関心に向け、『新
編武蔵風土記
稿』など幕府の
編纂事業を主導
した。また、和
漢の詩才にも優
れた。寛政の三
博士の一人。

②しばのりつざ
ん

(1736~1807)

江戸時代の儒学
者・文人である。
寛政の改革に伴
う寛政異学の禁
の指導者。これ
により、寛政二
年に湯島聖堂の
最高責任者とな
る。寛政の三博
士の一人。

③べいふつ

(1051~1107)

中国北宋時代の
書家・文学者・
画家・収蔵家・
鑑賞家。

市川米庵（安永八年：1779～安政五年：1858）は、幼名を才太郎という。また、米庵の誕生したのが亥年・亥日・亥刻であったことから、彼が3歳の頃、三亥に改名した。字は、孔陽・小春といい、通称は小左衛門と称された。号は、米庵の他に、楽斎・亦顛道人・金洞山人・半千筆斎・小山林堂等がある。姓は源といい、江戸京橋桶町に生まれた。幼少より昌平黌學員長であった父の市河寛齋に教育を受け、さらに昌平黌で林述斎①や柴野栗山②らに就いて、儒学や詩文を学んだ。文化八年、富山藩に仕えた後、加賀藩に仕えた。

米庵の学書の基盤は、米芾と顔真卿を根底に、晋唐の書にある。特に米芾③に至っては、「米庵」の号の由来に仕立てる程、私淑していた。米芾に関心を抱くきっかけとなったのもまた父の寛齋や祖父蘭臺の影響によるものであった。

また、米庵は、自ら積極的に明清時代の真蹟を蒐集し、それらを規範として書を学んだ。そのため、米庵の書風は比較的新しい時代に重点が置かれている。

寛政十一年（1799）、20歳の時に「小山林堂」と称した書塾を開いた。その後は、和泉橋藤堂候西門前に大きな屋敷を構え、約五千人の人々に書を教えた。米庵から書を習う人々は、庶民だけではなく、大名も含まれていた。米庵の門人となった、名のある大名には、尾張の徳川、津の藤堂、徳山の毛利、鯖江の間部などがいる。

享和二年（1802）、23歳の頃に『米家書訣』を著した。これは、韓侂胄が刻した群玉堂帖中の、米芾の書いた序文に、その他の米芾の言葉等を加えて書き、編纂したものである。この経歴にみる通り、米庵は若い頃から蒐集する癖があったことが分かる。本来、祖父や父に感化されて育ったことが関与し、米庵は書画や骨董を好んでそれを蒐集するようになっていたのであるが、その文房趣味は学書の面でも大きな力を発揮していった。

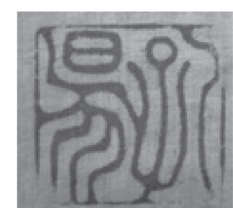
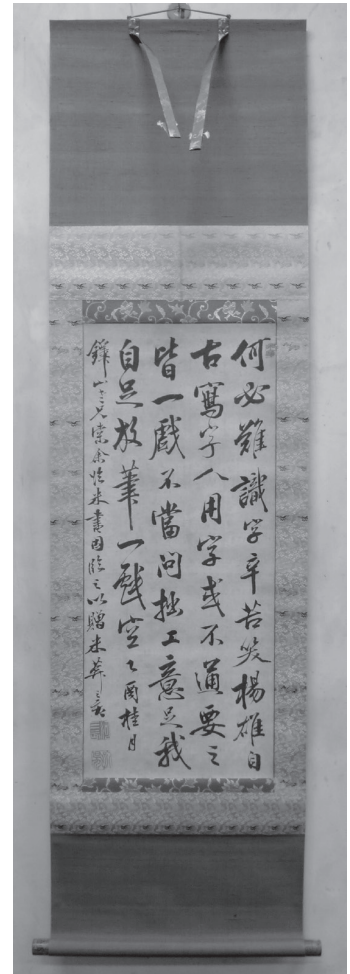
本軸の大きさは、縦166cm×横45.4cmであり、紙本部分は縦81cm×横33.5cmである。引首印（2.4cm×1.1cm）は朱文で「米庵」と押捺されている。落款印は二顆ある。まず、白文（3cm×3.5cm）で「河三亥」を押捺。次に、朱文で（3cm×3.5cm）「孔陽（陽）」を押捺している。保存状態は良好。積文は以下の通り。

何必難識字辛苦笑楊雄自 / 古写字八用字或不通要之 / 皆一戲不当問拙工意足我 / 自足放筆一戲空

乙酉桂月 鐸山老兄索余臨米書因臨之以贈米葦三亥

落款に「乙酉桂月」とあることから、本軸は1825年（文政八年）の八月、米庵が46歳の時揮毫した作品であることが判明。また、「鐸山老兄索余臨米書因臨之以贈米葦三亥」とあることから、米庵が、鐸山という人物から米芾の書を臨書するよう依頼され、それに応じて制作した作品であることが分かる。

〈立和田〉



日書 19 いちかわべいあん ごぎょうしよふく 市河米庵 五行書幅

クE213

軸装

①こちょうしん
(生卒年不明)
1803年に来日
した清人の医師。

②りょうどう
しよ
(1723~1815)
浙江省杭州の人。
書・詩・画・鑑
別に長じた。

③おうじゅ
(1668~1743)
書論に長じた。
帖学派の代表。

④しゅりてい
(生卒年不明)
清代の書家。

⑤やまうちこう
せつ
(1799~1860)

江戸後期の書画
家・詩人。

⑥ちょうよく
(1727~1812)
清朝の代表的な
考古学者。号は
甌北。

米庵の優れた所は単に蒐集することだけではない。自らが集めたものは、それをまとめて体系づけを行い、著述として著し、他の人々にもその業績を割り当て、より広く用いられるようにするという心がけがあった。これは、米庵が生涯通して貫いたものであり、彼が儒教や程朱学の道徳心から影響を受けたことが関係している。

文化一年（1804）米庵が25歳のとき、長崎を旅行した。その際に、米庵は病にかかったが、この当時来泊をしていた、清人の胡兆新^①から治療を受けた。彼は書も善くしたので、米庵は書法軌筆のことを聞くなどして次第に深く感化されていった。

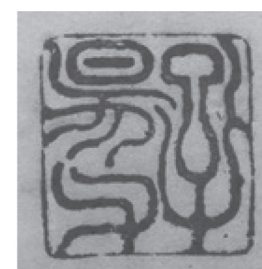
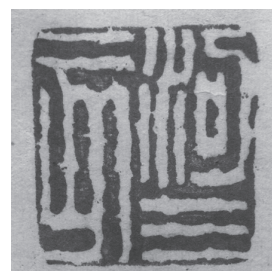
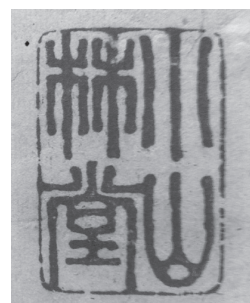
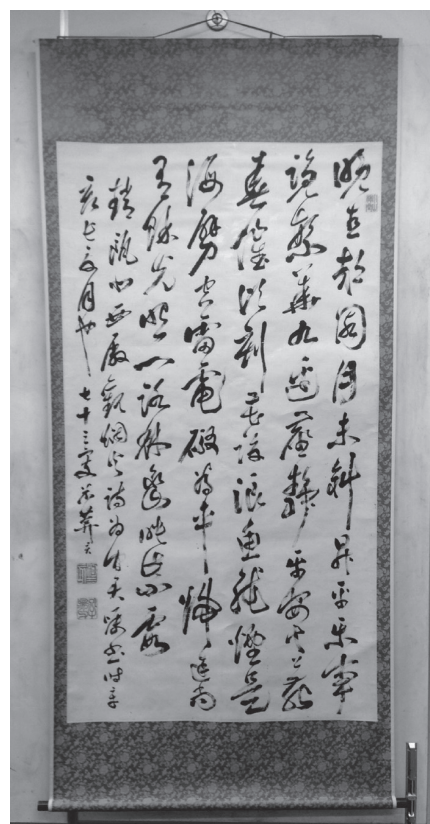
文化十二年（1815）米庵が37歳のとき、梁同書^②から書論を送られた。これをきっかけに、王澐^③の著した『論書賸語』と朱履貞^④の『書学捷要』とを合わせて、『清三家書論』を刊行した。これにより、清人の新しい書論が日本に紹介されることとなった。

米庵は、当時から能書として有名であったため、彼の書を求めて多くの人が集まった。その際に、漢籍の中から良い言葉を見つけると、控えておき、いつも座右において揮毫するとき役に立っていた。それらの書き溜めた言葉は、数十巻にもおよび、彼はこれを『墨場必携』と名づけた。それを、弟子の山内香雪^⑤らが六巻にまとめたものが、現在使用されている『墨場必携』である。この他にも、『畧可法』『米菴藏筆譜』『楷行纂編』『米菴墨談』『小山林堂書画文房図録十卷』『米庵百絶』などを編纂した。

本軸の大きさは、縦225cm×横103cmであり、紙本部分は縦107cm×横92.5cmである。引首印（3.2cm×4.7cm）は朱文で「小山林堂」と押捺されている。落款印は二顆ある。まず、白文（6.3cm×6.3cm）で「河三亥」を押捺。次に、朱文（6.3cm×6.3cm）で「孔易父」を押捺している。本紙には虫食いの跡が見られる。釈文は以下の通り。

晩直郊園月未斜昇平樂事 / 覽繁華九辺塵静平安火上苑 / 春催頃刻花跋浪魚龍煙是 / 海劈空雷電礮為車帰途尚 / 有餘光照一路林巒映廠霞趙甌北西廠觀烟火詩為官君囑書時辛亥長夏月也七十三叟米菴亥

落款に「七十三叟米菴亥」との記載があることから、本軸は米庵が73歳の時に揮毫した作品で、趙翼^⑥が上元節の状況を詠った「西廠觀烟火詩」を書いたものであることがわかる。



〈立和田〉

日書 20 市川米庵 六曲屏風
 いちかわべいあん ろつきよくびょう ぶ

ク-005

216

S62

屏風



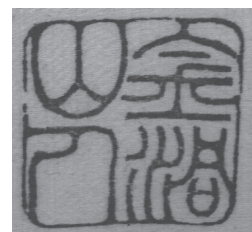
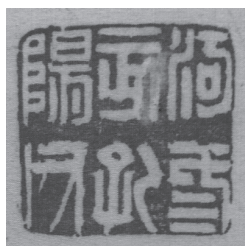
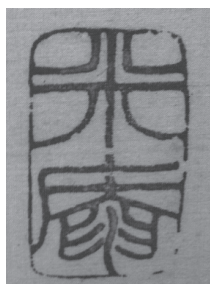
屏風の大きさは、縦 173.5cm×横 376cm（一曲の紙本部分縦 131.5cm×横 42cm）であり、絹本に揮毫されている。引首印（5.4cm×3.2cm）は、朱文で「米庵」を押捺。落款印は二顆あり、まず白文（4.5×4.5cm）で「河参亥孔陽父」を押捺し、次に朱文（4.5×4.5cm）で「金洞山人」を押捺している。保存状態は良好。釈文は以下の通り。

杜工部古柏行 / 孔明廟前有古柏柯如青銅 / 根如石 / 霜皮溜雨四十圍黛 / 色参天二千尺君
 臣已與時 / 際会樹木猶為人愛惜 / 憶昨路繞錦亭東 / 先主武侯同闕宮 / 崔嵬枝幹郊原古 / 窈窕
 丹青戶牖空 / 落落盤踞雖得地 / 冥冥孤高多烈風 / 扶持自是神明力 / 正直元因造化功 / 大厦如
 傾要梁棟 / 萬牛廻首邱山重 / 不露文章世已驚 / 未辭剪伐誰能送 / 苦心豈免容螻蟻 / 香葉會經
 宿鸞鳳 / 志士幽人莫怨嗟 / 古來材大難為用 癸卯歲梅夏書米葦亥

落款に「癸卯歲梅夏」の記載があることから、本作品は 1843 年 5 月、米庵が 64 歳の頃に揮毫した作品であることがわかる。その内容は、杜甫の「古柏行」という詩を書いているが、原文と本屏風とを比較すると、二行目の上から六文字目が原文では「老」になっているのに対し、本屏風では「古」になっている。だが、顔真卿や董其昌が書した「古柏行」も、米庵と同様に「古」と揮毫しており、米庵もこれら先人を倣ったものと考えられる。

詩の内容は、夔州の武侯（諸葛孔明）の廟にある古い柏の木について詠んだもので、杜甫の大歴元年の作である。詩は大きく三段に分けることができ、まず第一段では、夔州の柏の木について述べている。次ぐ第二段では成都の柏の木について述べ、第三段では、柏の木に対する詩人の感慨を表現している。この詩は、自己の不遇を、病み衰えた草木に譬えて訴えた杜甫の名作である。

（立和田）



日書 21 篠崎小竹 行書軸

しのざきしょうちく ぎょうしよじく

クE55
クE52
卷子

①とほく
(803~853)

晩唐の詩人。杜甫と区別するために「小杜」とも呼ばれる。

②いそう
(836~910)

晩唐の詩人。

③ちょうひつ

(生没年不詳)

唐末~五代・後蜀の詩人。

④さいちょうしゅう

中国、唐詩の選集。各巻100首、計1000首の詩を収録し、作者は唐代全体にまたがる。

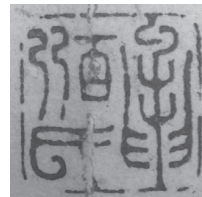
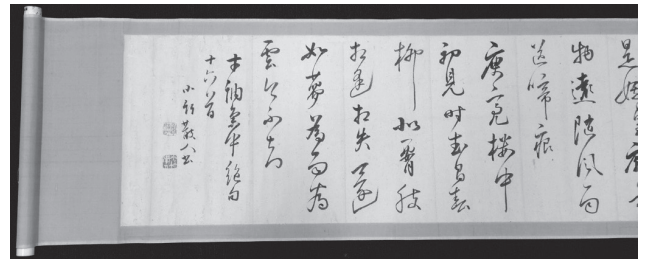
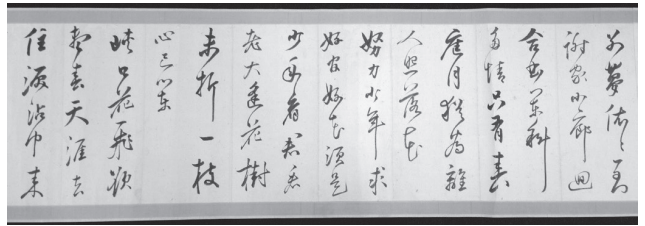
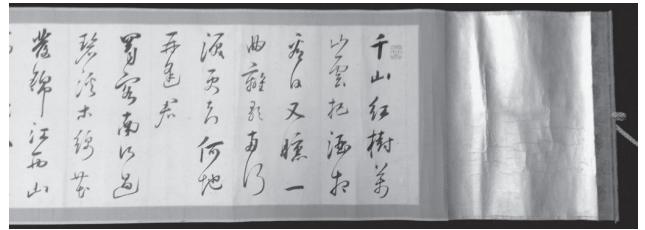
本作品の筆者は篠崎小竹（天明元年：1781～嘉永四年：1851）である。詳細は「日書22」を参照していただきたい。

縦211.5cm×横53cm、紙面部分縦136.5cm×横41cmで、積文は以下の通りである

千山紅樹萬／山雲把酒相／
看日又曛一／曲離歌兩行／
淚更知何地／再逢君／
蜀窮南行過／碧溪木綿花／
發錦江西山／橋日晚人來／
少時見猩々／上枝啼／
落托江南載／酒行楚腰織／
細掌中輕十／年一覺揚州／
夢贏得青／樓薄倖名／
倚溪侵嶺多／高樹誇酒書／
旗有小樓驚／起鴛鴦豈無／
恨一雙飛去／却回頭／
幾年無事傍／江湖醉倒黃／
公舊酒壚覺／後不知秋月／
公滿身花影／倩人扶／

游子離魂瀧／上花風飄浪／卷透天涯一／年十二度／圓月十一回圓／不在家／
一生風月供／惆悵到處烟／花恨別離止／竟多情何處／好少年長抱／長年愁／
溶々漾々白／鷗飛綠淨春／深好染衣南去／北來人自老／夕陽長送釣／船婦／
別夢依々到／謝家小廊迴／合曲闌斜／多情只有春／庭月猶為離／人照落花／
努力少年求／好官好花須是／少年看君看／老大逢花樹／未折一枝／心已闌／
峽口花飛欲／盡春天涯去／住淚沾巾來／時萬里同為客／今日翻成送／故人／
蝶散鶯啼／尚數枝日斜／風定更離披／看多記得傷心／事金谷樓前／委地時／
罷釣婦來不／繫船江村月／落正堪眠縱／然一夜風吹／去只在蘆花／淺水邊／
輕花細葉滿／林端昨夜春／風曉色寒黃／鳥不堪愁裡／聽綠楊宜向／雨中看／
一枝斑竹渡／湘沅萬里行／人感別魂知／是娥皇廟前／物遠隨風雨／送啼痕／
庾亮樓中／初見時武昌春／柳似腰肢／相逢相失還／如夢為雨為／雲今不知／
才調集中絕句／十六首／小竹散人書

引首印は縦3cm×横1.5cmで「小竹齋（朱文）」、引首印は2.5cm×2.5cmで「承弼氏（朱文）」「小竹學人（白文）」が押捺されている。杜牧^①や韋莊^②、張泌^③など唐代の詩人の漢詩を収録した『才調集^④』を揮毫している。誤字や脱字が見られる箇所がある。 〈豊〉



日書 22 篠崎小竹 三行書

クE220
軸装

- ①しのぎきさんとう
(1737~1813)
江戸後期の儒学者。「梅花社」の創設者。
- ②日書 14 参照。
- ③おくのしょうざん
(1800~1858)
江戸時代後期の儒学者・漢学者。篠崎門下四天王の一人といわれる。
- ④はしもところ
(1809~1865)
江戸時代後期の儒学者。伊丹明倫堂の初代教頭となり、のちに大坂に塾を開く。
- ⑤いなげおくざん
(1755~1823)
江戸時代後期の篆刻家。讃岐高松藩士であったが、辞して京都の儒者・皆川淇園に師事。のちに高芙蓉に篆刻を学ぶ。
- ⑥日書 12「注」参照。
- ⑦日書 12 参照。

篠崎小竹（天明元年：1781～嘉永四年：1851）は、江戸時代後期の儒学者、漢詩人である。名は弼。小竹・畏堂・南豊・聶江と号した。大坂京町堀で豊後出身の医学者加藤周貞の子として誕生し、9歳より荻生徂徠の学統で混沌詩社の篠崎三島^①に学び、13歳で養子に入った。養父の命で江戸に上り、昌平齋で古賀精里^②に師事し、朱子学統を承けて帰坂した。家塾「梅花社」を継ぎ、犬齋橋より斎藤町に移って経営に努め、見識張らず町儒者に徹して父の盛を凌いだ。門人録には全国よりの入門者名を連ね、奥野小山^③・橋本香坡^④らはその高弟である。父子とも淡路稲田氏の宝師に召された。71歳で自宅にて没す。『小竹斎詩抄』などの自筆文稿がある。

詩と書に巧みで、詩は清詩を宗とし、書は豊潤適麗、書法帖を多く揮毫した。書簡を刊行しようとする者の多くが小竹に序・題・跋などの文章を求めるほど人気があった。篆刻も得意とし、稲毛屋山^⑤の『江霞陰影』にその印が掲載されている。

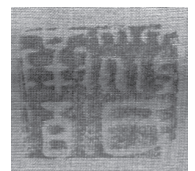
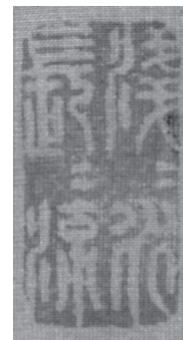
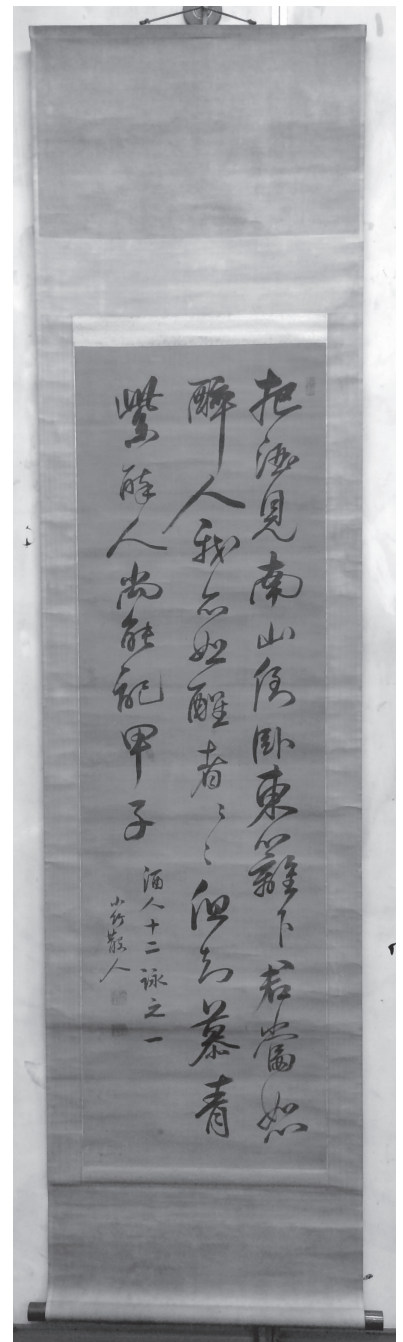
頼山陽^⑥とも親しく、三島が萱茶山^⑦と悶着のあった山陽を預かることとなり、山陽の才能を見抜いた小竹は、茶山との間柄を取り持ち常に山陽を擁護した。二人の関係は生涯続き、山陽の詩集や遺稿の序文を撰し、遺児の面倒もみた。

本軸は縦 211.5cm×横 53cm（紙面部分は縦 136.5cm×横 41cm）で、釈文は以下の通りである。

把酒見南山倒臥東籬下君當想
醉人我亦如醒者々二但知慕青
紫醉人尚能記甲子

酒人十二詠之一
小竹散人

引首印は 3cm×1.5cm で「浅々水長々流（白文）」、落款印は 2.5cm×2.5cm の白文で「篠弼之印（回文）」と「篠氏承弼」が押捺されている。〈豊〉



日書 23 江馬天江 行草軸

クE221
軸装

①やながわせい
がん
(1789～1858)
漢詩人。

②いたくらかい
どう
(1822～1879)
勤王家。江馬天
江の兄。

③とみおかてっ
さい
(1837～1924)
文人画家。儒学
者。

④ごうやまほう
よう
(1824～1889)
漢詩人。儒者。

⑤らいしほう
(1823～1889)
儒者。

⑥たにぐちあい
ざん
(1816～1899)
文人画家。

⑦ちょうこうら
ん
(1804～1879)
女流漢詩人。梁
川星巖とは又従
兄妹の関係でも
ある。

⑧やまなかしん
てんおう
(1822～1885)
書家。政治家。

⑨おのこざん
(1814～1910)
漢詩人。

江馬天江（1834：文政八年～1901：明治三十四年）は近江国坂田郡下坂中村の下坂幸内の六男として生まれた。名は聖欽，字は永弼，号は正人，天江と称した。幼い頃より読書を好み，早くから才能に恵まれていたという。

18歳の頃，医学を修め，京都の江馬榴園という仁和寺宮侍医の養子となり，名を駿吉と改めた。大阪におもむき，蘭学者である緒方洪庵について洋学を学び，そのかたわら梁川星巖①の門に入り，詩を学んだ。彼の詩集に『退享園詩鈔』，題画集に『賞心贅録』がある。

天江が生きた時代は，ちょうど幕末の国事多端の際で，板倉槐堂②とともに正統を固辞し，諸名士と交わり，国事に尽力した。慶応二年（1869）太政官吏官に任ぜられ，この時名前を正人と改めた。

明治九年官を辞し，住居を京都東山に移し，儒教を教授した。その後，西園寺公望が京都の私邸に私塾「立命館」を創立した際には，板倉槐堂・富岡鉄斎③・神山鳳陽④・頼支峰⑤・谷口露山⑥・梁川星巖未亡人の張紅蘭⑦・山中信天翁⑧・小野湖山⑨らと共に宝師として招かれている。明治三十四年三月八日，77歳で病没した。彼の墓は，東山高台寺にある。はじめ墓誌銘は親友の谷鉄臣に依頼されたが，病床にあったため，小林卓斎が代わった。

晩年はもっぱら臨池吟詠に意をそそいだ。その書は行草を主とし，洗練された独自の雰囲気をもっている。元代の馮子振を学んだといわれ，その新奇な風格においては，明治の書人のなかでも特に抜きんできているといわれる。

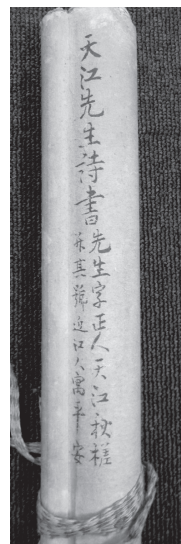
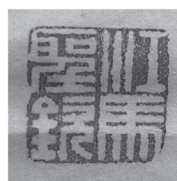
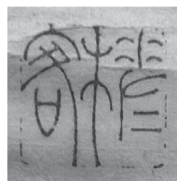
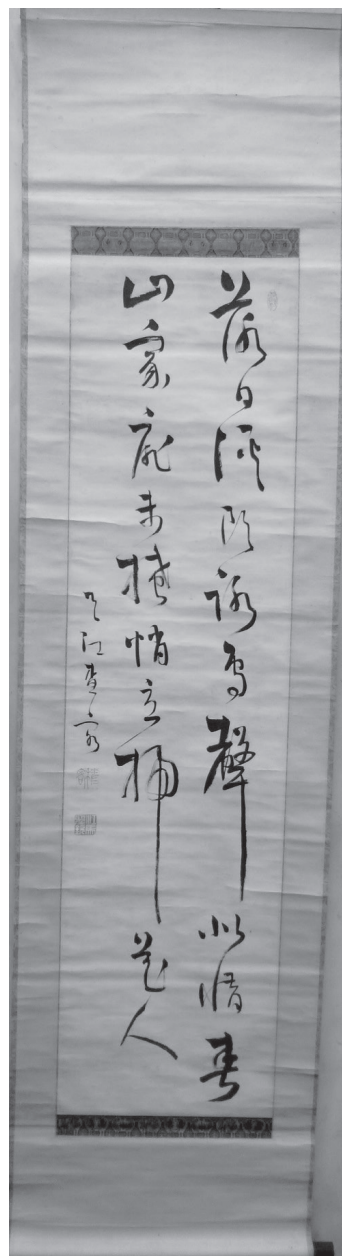
積文は以下の通り。
落日溪（溪）頭踏鳥聲（声）似惜春／
山家扉未掩悄立掃花人／天江查客

全体大きさは，縦187cm×横47cm，本紙は，縦129cm×横33cmである。

落款印は，上下共に3cm×3cm「槎客（朱文）」「江馬聖欽（白文）」，引首印は3cm×1.3cm「別有洞天（朱文）」が押捺されている。

軸裏に「天江先生詩書 先生字正人天江秋槎 并其號近江人寓平安」記載がある。裏全体に破れのような傷みがあり，折れも見受けられる。

彼らしい，無理のない運筆が本軸からも見受けられる。
〈小形〉



日書 24 ちょうさんしゅう ぎょうそうしよじく 長三洲 行草書軸

クE212

軸装

①ちょうめいがい

(1810~1885)

名は允，字は允分，世文。号は梅外また南梁。幕末，明治期の医者，儒学者。経史にも精通し，詩，書を能くした，76歳歿。

②ひろせたんそう

(1782~1856)

江戸後期の儒者，漢詩人，教育家。名は簡，のち建。字は廉卿，のち子基。旭莊の兄。豊後日田の人。学塾咸宜園を開き敬天を旨とする教育を行う。著「淡窓詩話」。

③ひろせきよくそう

(1807~1863)

江戸後期の儒者，漢詩人。淡窓の弟。兄に代わり学塾咸宜園を監督，のち堺に出て逍遥吟社をおこす。著「梅墩詩鈔」。

長三洲（天保四年：1833～明治二十八年：1895）は幕末，明治時代の漢学者，書家である。本姓は長谷，名は莢（ひかる），字は世章・秋史。号は三州，通称は富太郎または光太郎。天保四年，豊後日田の長梅外^①の長男として生まれた。

早くから父の薫陶を受け，四書五経を修め，11，12歳の時にはすでに大人に伍して詩文を作ったという。広瀬淡窓^②の咸宜園に学び，門下生の中で頭角をあらわし，のちに大阪に出て広瀬旭莊^③の塾の塾長をつとめた。これによって京阪の文人のあいだに三洲の名が知れ渡るところとなった。一旦帰郷したのちに長門藩に仕え，奇兵隊に加わって実戦に従事し，討幕を実現した。

維新後は新政府に出任し，大学少丞，文部大丞，文部省学務局長，正院一等編集官，侍読などを歴任。この間，明治四年～五年，学制取調掛に任ぜられ，学制の制定に参画した。書画に巧みで，特に書家として名高く，習書御用掛として明治天皇の書道の指導にあたった。明治十八年七月天皇が伊藤博文邸に行幸した際には，父：梅外や他の書家とともに御前揮毫を行なった。明治二十八年三月十三日，東京牛込の船河原橋幽立庵で病歿。著書「新封建論」「書論」などがある。

本軸の釈文は以下の通り。

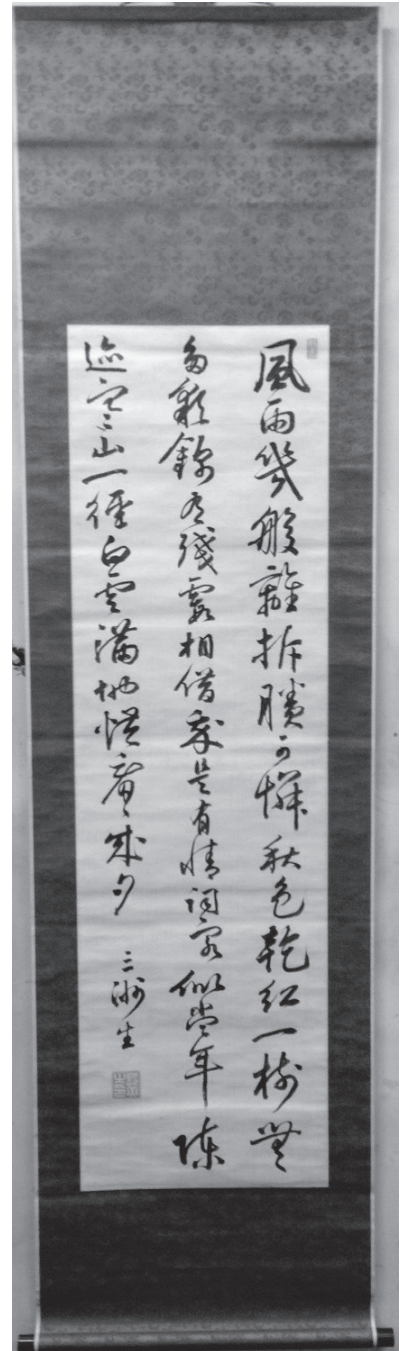
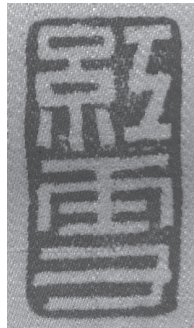
風雨幾般離拆勝可憐秋色乾紅一樹無／多彩錦有殘露相借
黍是有情詞家似尚年陳／迹寒山一徑白雲滿地□看々成夕／三洲生

作品全体の大きさは縦 201.5cm×横 54cm。

紙面部分は縦 133cm×横 39cm。

落款印は「長莢之印」（4.5cm×4.5cm）とあり，引首印は「紅雪」（3cm×1.5cm）が押捺されている。

〈高〉



日書 25 ^{いわや いちろく そうしよじく} 巖谷一六 草書軸

クE51
軸装

①みながわさい
えん

(生卒年不詳)

名は善、字は子
継、号を西園と
称した。京都の
人であり儒者。

②いえさとしよ
うとう

(1827~1863)

本姓は近藤。名
は衡。字は誠県。

巖谷一六（天保五年：1834～明治三十八年：1905）は、近江水口藩の侍医、巖谷玄通の子として生まれた。名を修といい、字を誠卿と称し、後に立的と改めている。号は一六、その他に古梅、迂堂、金栗などがあるが、皆その別号である。

彼は、5歳の時に父を失い京都で育った。16歳の時、三角東園の門に入り医術を修め、かたわら經史詩文を皆川西園①、家里松嶠②に就いて学んだ。20歳頃再び水口藩に帰り侍医として仕えた。謹王佐幕両派が入り乱れる時代であったが、一六は広く四海の士と交わって勤王を唱えた。

明治元年に徴士となり、総裁局史官試補、翌年大史に任ぜられ、その後枢密小史、権大史、大書記官を歴任し、内閣書記官を経て元老院議員から明治二十四年勅選により貴族院議員となった。三十八年、71歳で没し、京都東山の正法寺に葬られた。

一六は、気象が大きく誰とでも交わる性格であったという。酒席でもたちどころに即興の詩をもにし揮毫した。詩、書、画それぞれに豊かな天分を合わせ持った人物であった。また義俊心にあつく貴賤の別なく多くの人と交わったので敬愛の的であった。そのため友人知人も多く、年に何回も国内を漫遊しており、その地方の処々には条幅、屏風、額などの多くの名蹟が遺されている。また、碑文も多く残されている。

一六は、書学の面で日本書道史に於いて大きな役割を果たしている。彼の書について詳しくは「日書 26」で触れたい。

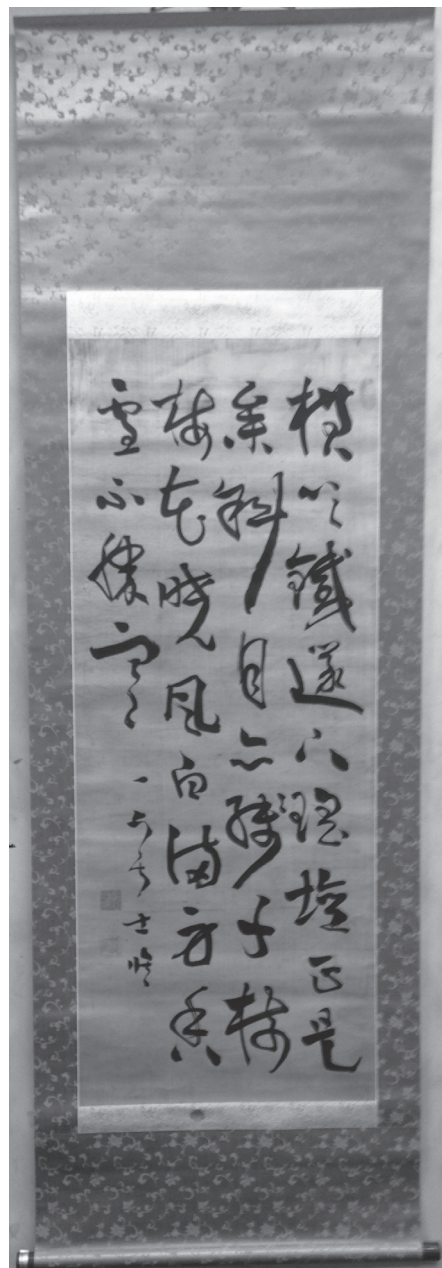
本所蔵品は軸装であり、全体の大きさは、縦 208.7cm×横 66.4cm。本紙の大きさは、縦 130cm×横 51cmである。

積文は以下の通り。

横吹鐵遂下瑤壇正是／集斜月亦千樹／梅花曉風
白満身香／雪不勝寒 一六居士修

落款印は縦 3.5cm×横 3.5cmで「巖谷修印（白文）」「誠氏卿（朱文）」、引首印は縦 5.5cm×横 2.5cmで「天賜清福（白文）」が押捺されている。絹本に書かれており、本紙の左上部分に若干のシミがある。

〈小形〉



日書 26 ^{いわや いちろく} 巖谷一六 ^{うたじく} いろは歌軸

イ～M30 S48
軸装

- ①なかがわせつじょう (1808～1866) 名は俊卿，字は子国。江戸時代に活躍した書家。
- ②ふじもとてっせき (1816～1863) 諱は真金。字は鑄公。など。幕末の志士であり書画家。
- ③まきりょうこ (1777～1843) 名は大任。字は致遠など。菱湖は号。書家。市河米庵，貫名菘翁と共に「幕末の三筆」にかぞえられる。
- ④ちょうすごう (1254～1322) 子昂は字。号は松雪。政治家であり文人。
- ⑤ようしゅけい (1840～1915) 字は惺吾，号は鄰蘇老人。湖北省宣都の人。
- ⑥日書 28 参照。
- ⑦まつだせっか (1823～1881) 名は元修，字は子踐，幼名は慶太郎。伊勢山田の書家。

巖谷一六の生い立ちと書学に関しては、「日書 25」で参照いただきたい。ここでは一六の書学について述べる。

書については京都時代に中沢雪城^①に、画は藤本鉄石^②に学んでおり、後に、巻菱湖^③・趙子昂^④の書を好んで習い、一家を成していた。明治13年に楊守敬^⑤が清国公使館として来日した日、且下部鳴鶴^⑥・松田雪柯^⑦とともに教えを受けるようになり、数多くの中国の古碑古帖に触れることで大きな刺激を受けた。そして日本の書の遅れを知ったのであった。

楊守敬とのやりとりは、言葉が通じないため筆談をもって行われており、その書跡が「書芸」誌上に掲載されたことがある。小島氏は著書の中で、その苦労の様子を「誠に興味ぶかいものがある。」と述べている。

これを期として一六の書風も変わり、天分豊かな清新な書を打ち出すようになり、一六独特の風格を持つ書になっていった。

また雅号の由来は、明治初期の役所の休日が一と六のつく日で、「その日は出仕せず筆を持つ日で必ず勉強するべし」と自ら定め、一六という号を付けたと言われている。

作品全体の大きさは縦183cm×横85cm、本紙は、縦138cm×横78cmである。

積文は以下の通り。

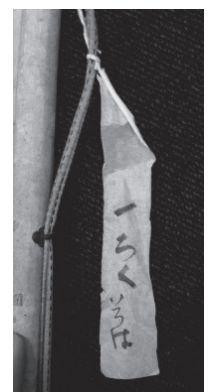
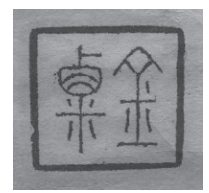
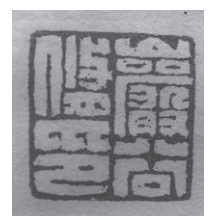
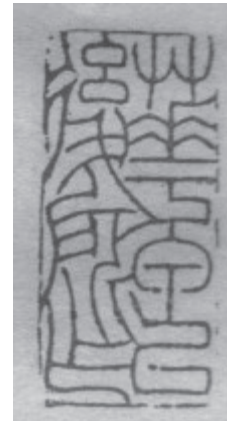
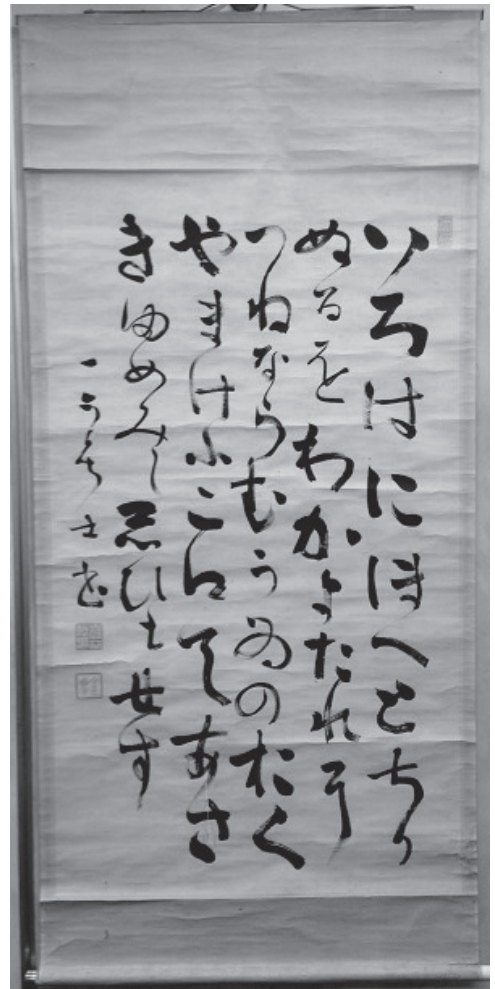
いろはにほへとちり／ぬるをわかよたれそ／つねならむ
うるのおく／やまけふこへてあさ／きゆめみしゑひも
せす／一六居士書

落款印は両者共に縦5cm×横5cm「巖谷修印(白文)」
「金粟(朱文)」，引首印は「華甲以後所乍(作)(朱文)」
縦5.8cm×横2.8cmが押捺されている。

軸紐に「一ろく いろは」と記載された紙が結んである。

折れによる痛みが見受けられ、軸裏には虫食いもある線の太細が大胆につけられており、全体から気迫が感じられる作品である。後半にいくにつれ、一六の筆に興じる様が窺えるだろう。

〈小形〉



日書 27 さんじょうさねとみさんじょうこうおんか 三條実美 三條公御歌

クE3008

軸装

①たにもりよし
おみ

(1817~1911)

幕末・明治時代の
国学者。②いけうちとう
しよ

(1814~1863)

江戸時代後期の
儒学者。③当時、大老で
あった井伊直弼
のこと。④実美・三条西
季知・東久世通
禧・壬生基修・
四条隆譚・錦小
路頼徳・沢宣嘉
のこと。三条西
季知や東久世通
禧は文墨の世界
に足がかりを
持っていた。⑤七卿のうち、
沢宣嘉（脱走）、
錦小路頼徳（病
死）以外の5人
のこと。⑥空海の書を
慕った書流。書
道史においては、
桃山から江戸の
加茂社の祠官、
藤木敦直によっ
て立てられた一
派をさす。⑦明治二十三年、
田中光顕・高崎
正風を中心に結
成。仮名書道の
古典研究会。多
田親愛、大口周
魚らが会員。

三條実美（天保八年：1837～明治二十四年：1891）は、幕末・明治時代の政治家である。諱は実美，字は遜寂，幼名は福麿，梨堂と号す。贈右大臣三条実万の第四子として京都梨木町の邸で生まれる。生後洛東の農家，楠六左衛門に保育され，帰邸後，家臣で尊攘志士の富田織部の訓育を受けた。また谷森善臣^①や池内陶所^②らに学んだ。18歳で従五位上に叙され侍従となる。その数年後，父（実万）が朝廷内反井伊^③派の弾圧で辞官落飾となると，実美も政争の渦中に巻き込まれ父の立場を受け，尊攘派公家へと成長していく。

その後，公武合体をとる薩摩藩に対抗して長州藩が反幕攘夷へと急転し，京都政局の主導権を握ると，実美は公家尊攘派の中心的地位に立つようになった。しかし，八月十八日の政変で，実美ら同派公卿七名が長州藩とともに追われ，長州へ下る七卿^④落ちとなった。七卿は官位を褫奪されたので，実美は，実（まこと），梨木誠斎の仮名を用いた。元治元年，長州は禁門の変で敗北に終わると，朝敵となり，五卿^⑤の立場も変わった。その後，長州藩は，筑前藩に五卿転移を決し，実美らを太宰府に移した。かくして，五卿は延寿王院を仮寓として大政復古を迎えた。明治元年には，岩倉具視と並んで副総裁として新政府の要職に就き，後に太政大臣となり，十八年の太政官制廃止まで政府最高の地位にあった。後の黒田内閣では一時首相を兼任。55歳で没す。歌集には、『梨のかた枝』がある。

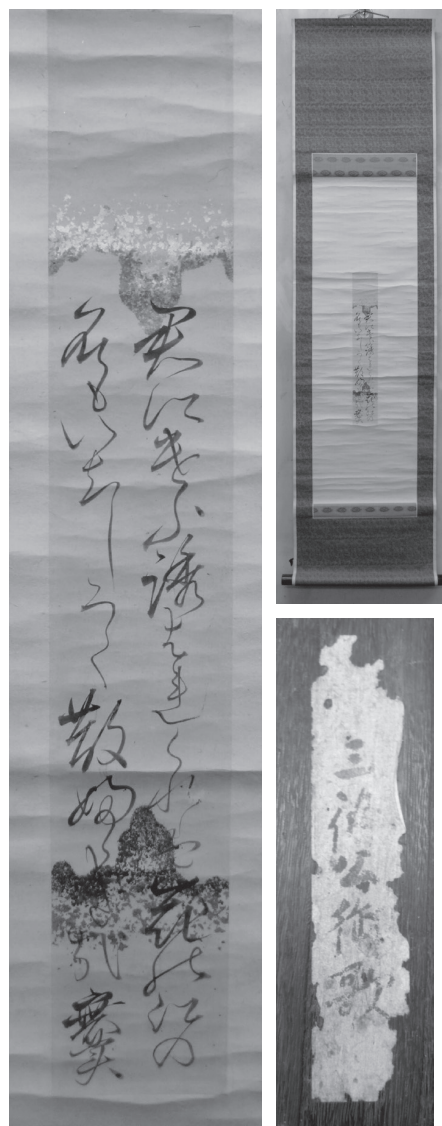
書に関しては，大師流^⑥を学んだといわれ，七卿の一人である通禧らと難波津会^⑦を組織し，古筆をはじめとする書跡の研究と書の研鑽に努めた。日下部鳴鶴とは，太政官在籍中に親交し，自宅に梨堂が揮毫した扁額があったといわれる。

本軸は，縦135cm×横34cm（紙本部分縦77cm×横24.5cm），短冊の大きさは縦35cm×横6cmである。積文に関しては以下の通りである。

「君に遣（け）ふ誘者（は）連（れ）くれ盤（は）花能（の）江の名
もい知（ち）しろく散（さ）婦（ふ）き哉 実美」

箱の表書きには「三條公御歌」，上側面には「洛花の歌 洛花歌 三條実美公」と記されている。

福岡教育大学付近の旧唐津街道赤間宿には，五卿が筑前入りした際（慶応元年：1865），赤間宿の御茶屋（本陣）に25日間滞在したことを示す遺跡（五卿西遷之遺跡）がある。題字は壬生基義（基修の子）の筆である。



宗像市「赤間上町」
交差点付近

日書 28 くさかべめいかくろんしよじく 日下部鳴鶴 論書軸

クE52 S43
軸装

①日書 16 参照。

②日書 26「注」
参照。

③おちせんしん
(1808~1880)
貫名菘翁の門人。

④日書 26「注」
参照。

⑤孫過庭 (643
~703) が撰書
した書芸術の価
値及び学書の理
念を論じた書論。
真跡草稿本が台
北故宫博物院現
蔵。

日下部鳴鶴 (天保九年: 1832 ~ 1922: 大正十一年) は彦根藩士田中総衛門の第二子として江戸の藩邸で生まれた。初名を八十八といったが後に東作と改めた。字は子暘, 号は明治頭には東嶼, 明治五, 六年には翠雨, 40 歳から鳴鶴に改め, 晩年には野鶴, 老鶴, 鶴叟の別号も用いた。日下部姓を名乗ったのは安政六年 22 歳の時, 同藩の日下部家へ養子に行ったことによる。

鳴鶴が書を志したのは 24 歳の時。明治維新政府が成立する八年前のことであった。その前年 (1860), 桜田門外の変が起り, 江戸幕府大老, 井伊直弼と養父を同時に失くしている。こうした幕末体制の末期的状況下で, 若き鳴鶴は蘭亭序に酒を供え数十年後の書業大成を期して臨池に専念することを誓った。

「無師独悟」といわれる鳴鶴はその後も良師に恵まれずにいたが, 27 歳の頃になってようやく幕末三筆の一人貫名菘翁^①の書に開眼して, その妙処を悟り菘翁の書に傾倒した。この時すでに菘翁はこの世になく直接師事することはできなかった。このことを生涯の痛恨事と嘆いた鳴鶴は, 法を求めて門下の松田雪柯^②, 越智仙心^③等々に問い, ついに菘翁の学書の要訣を発見した。それは「集帖より原碑を, 原碑より真跡によれ」という菘翁の教えであった。この定法の発見は, 後の鳴鶴の一貫した学書法をともなったばかりでなく, 近代書道の学書の定法ともなった。

この教えに従い, 明治二年の東京出仕以後はしきりに碑帖を求め, 中国歴代の書を研究する一方, 我が国の三筆, 最澄の名跡や古写経, 光明皇后の「楽毅論」などの真跡を学び, 法帖による帖学の大綱をほぼつかんだ。そうした頃, 大隈利通公が暗殺された。公に仕えて内閣大書記官だった鳴鶴は感ずるところがあって, その翌年の明治十二年に官を辞し, もっぱら臨池を業とする決意をしたのだという。

その後, 清の著名な金石学者である楊守敬^④の来日によって, 鳴鶴の書道人生は大きく変わる。そのことについては日書 29 で詳しく述べている。

作品全体のサイズは, 縦 194cm × 横 47cm, 本紙は 136cm × 34cm。折れによる傷みが見受けられる。

釈文は, 以下の通り。

壊素是狂張旭類當時草聖世喧／伝怪知正脉山陰訣別有過庭
／譜一編 鳴鶴仙史論書之一

自身の書論を書いたものである。孫過庭「書譜」^⑤を参考にしたと思われる字形・筆致があり, 風格を感じさせる。自らの書論を書譜風にしたのであれば大変粋な作品である。

落款印は 3.3cm × 3.3cm で, 「東乍之印 (白文)」図 1, 「桑石山房 (白文)」図 2, 引首印は 3.3cm × 1.3cm, 図 3「静観 (白文)」図 3 (小形) が押捺されている。

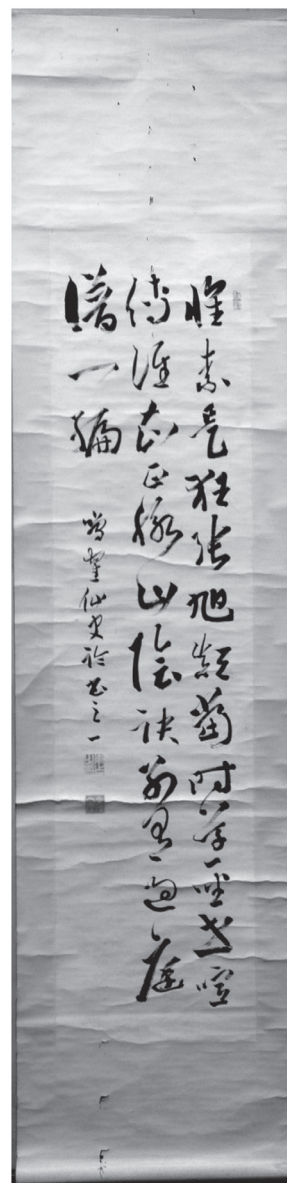


図 1

図 2



図 3



(小形)

日書 29 くさかべめいかくろんしよがく 日下部鳴鶴 論書額

元番号無し
扁額

①日書 26「注」
参照。

②日書 25 参照。

③腕を大きく廻し。肘から先をほぼ水平に半月の形に張り出して運筆する方法。

④ごだいちょう (1835~1902)

字は止敬、清敬。号は垣軒。清末の金石学者、書画家。

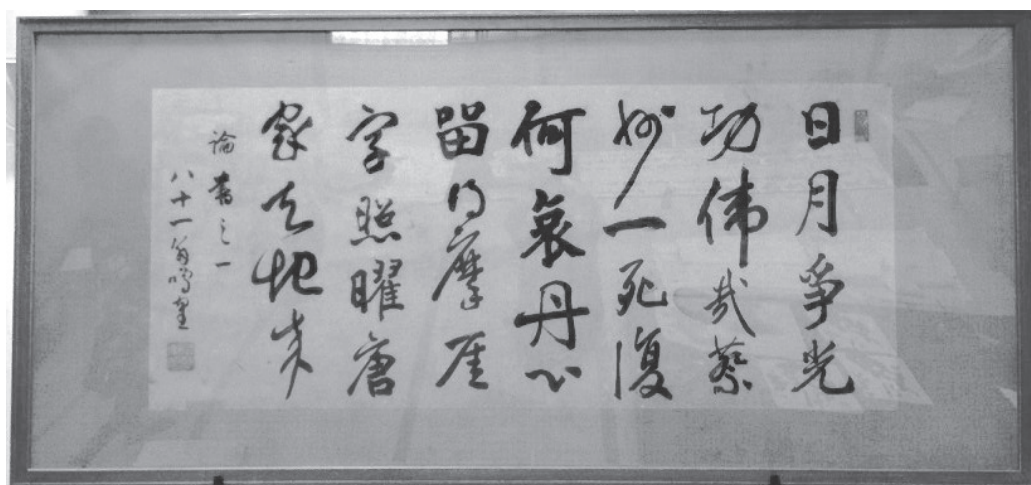
⑤ようけん (1819~1896)

字は見山。清の書家。詩文、古文、歴史に通じる。

⑥ごしょうせき (1844~1927)

字をはじめ香圃、のちに昌碩とする。清末の書・画・篆刻家。

⑦近藤雪竹、丹羽海鶴、比田井天来、黒崎研堂、山本竟山、井原雲涯、渡辺沙鷗、岩田鶴臯など。



日下部鳴鶴について、ここでは42歳以降のことを述べたい。それ以前の鳴鶴については日書 28 を参照いただきたい。

鳴鶴が書道に専心することを宣言して一年も経たない明治十三年、清の著名な金石学者楊守敬^①の来朝があった。楊守敬の感化の下で帖学からさらに碑学、六朝書道や篆隸の研究へと展開した。鳴鶴は一六^②・雪柯らとともに楊守敬を訪れ、約五年の間新しく清朝に興った金石学、書学を尋ね、廻腕法^③・用筆法の原理、古典法帖による書の歴史の実証的研究方法を学んだ。

楊守敬の帰国後、鳴鶴は六朝書道にもさらに傾倒して独自の個性を発揮し始めたが、明治二十四年54歳で中国を訪れ、書の本源の地を踏み、当地の名流呉大澂^④・楊岷^⑤・呉昌碩^⑥らと交わり、三代秦漢の古器にも触れ、大小二篆の妙と隸書の方勁古拙の致について悟るところがあり、大いに書域を広めた。その後83歳の生涯を閉じる約三十年間が鳴鶴流の書の完成期にあたっている。明治二十七年には積極的に後進の指導に取り組み、「同好会」を組織して門下の自由討究の場を設けるとともに、「談書会」をも発足させ、文人墨客との書道文化の交流も図った。大正六年には八十寿の記念事業として「大同書会」をおこし、機関紙「書勢」を発刊したが、この雑誌で鳴鶴流のその書法とその学殖を学び慕うものが多く、幾多の門下を育成した。晩年は成長した門下生^⑦の協力により悠々自適の生涯を送り、詩書画を楽しみ、数々の傑作を遺したが、73歳の時の大久保公神道碑、82歳の時の熊野馬溪遊草は特に傑出しているといわれる。

積文は以下の通り。

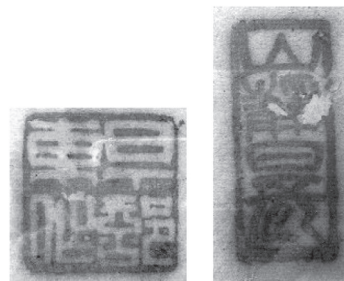
日月争光／功偉哉蔡／州一死復／何哀丹心／

留得摩崖／字照曜唐／家天地来 論書之一 八十一翁鳴鶴

全体のサイズは縦86.6cm×横186.6cmで、本紙は、縦59.5cm×横137cmである。落款印は「日下部東作」で大きさは4.9cm×5cm、引首印は「山静日長」で5.5cm×2.3cmである。

本額は、本学書道教室書道演習室2に展示している。楷・行・草の雑体書である。線の太細や文字の大小が明確で変化に富んだ作品であり、筆の弾力を生かし無理なく運筆されている様子が窺える作品である。

〈小形〉



日書 30 なかはらなんてんぼう しちごん しじく 中原南天棒 七言詩軸

クE253

軸装

①けいさく

禅宗で、座禅中の僧の眠気や気のゆるみをいましめるためなどに用いる棒。長さ1.3mほどで、先が板状をなす。

②らさんげんま (1815~1867)

江戸時代後期の臨済宗の僧。

③やまおかてっしゅう

(1836~1888)

幕末・明治時代の剣客。江戸開城の功労者、明治天皇の侍臣。一刀流を学んだ後、槍術の師山岡家を嗣いだ。槍術家高橋泥舟の妹婿にあたる。

④のぎまれすけ (1849~1912)

明治の陸軍軍人。静堂・秀顕・石樵・石林子と号した。日露戦後の姿は、戦争の悲運を象徴する将として国民の敬慕を受け、「聖雄」「軍神」として語り継がれている。

⑤こだまげんたろう

(1852~1906)

明治の陸軍軍人。17歳で戊辰戦争に参加し、非常に早い昇進を経て明治七年の佐賀の乱には大尉として出征。

中原南天棒（天保十年：1839～大正十四年：1925）は臨済宗の僧。肥前唐津（現佐賀県唐津市）に生まれる。名は全忠，字は鄧州，号を南天棒・白崖窟と称した。自ら切り出した南天の棒（警策^①）を愛用したことから，南天棒の別号で知られる。

11歳で平戸雄香寺に入ったのち，隠山・卓州両派下の二十四人の元で修行。明治元年（1868），29歳の時に筑前久留米梅林寺の羅山元磨^②から印可を授かる。混乱する瑞巖寺建て直しのため，本山妙心寺長老会議で特命派遣され，明治二十四年（1891）に瑞巖寺124世となる。財政の立て直し，寺宝の整理・修理を押し進めるも，末寺の反発を招き，さらに伊達政宗木像破損事件のため，明治二十九年には仙台大梅寺，白石傑山寺を経て兵庫県西宮海清寺に移る。山岡鉄舟^③，乃木稀典^④，兄玉源太郎^⑤らも参禅した。瑞巖寺に伝わる多くの書画を修理し今に残した。

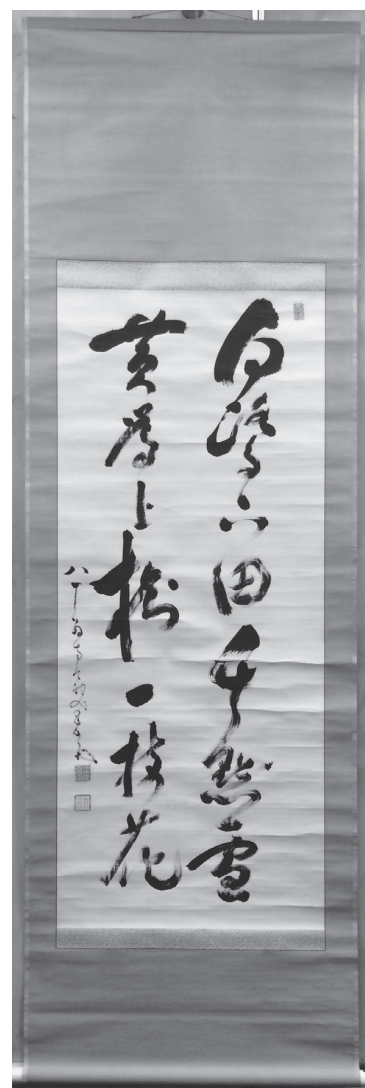
釈文は「白鷺下田千點雪／黄鷺上樹一枝花／八十翁南天坊（花押）書」とあり，「白鷺田に下れば千点の雪，黄鷺の樹に上れば一枝花」（白鷺が田に降るとまるで雪が点々と降ったようであり，鷺が木に上るとそれは一枝花のようである）という七言詩である。

これは，江戸中期の禅僧，白隠慧鶴（はくいんえかく）（1685～1768）が60歳の時に般若心経を解説した著書『毒語心経』の中の「無苦集滅道」の一節。白隠の遺した数ある著書の中で経典を題材にしたものは，この『毒語心経』だけである。

本作品の大きさは，縦210.5cm×横66.2cm，紙本部分は縦128cm×横53.5cm，保存状態は非常に良好である。木箱には「南天坊遺墨」との墨書があるが，南天棒は80歳以降の作品も多く遺されているので遺墨との断定はできない。

引首印は「南天棒」（縦3.2cm×横2cm），落款印は，白文で「白崖窟」，朱文で「鄧州」（白文朱文ともに縦3cm×横3cm）が押捺されている。

全体として一貫した力強い筆致で書かれており，特に一字目の「白」の第一画目にあるような，思い切った勢いのある線には，南天棒の堂々たる風格を感じる。また，落款にある，軽やかにリズムよく交差する連綿線と三つの丸い形が連なるような花押はとても表情豊かで面白みがある。



日書 31 たかはしでいしゅう いちぎょうしよ
高橋泥舟 一行書

クE3009
S-22

① 日書 30「注」
参照。

② かつかいしゅう
う
(1823～1899)
江戸時代末期から
明治時代初期の
幕臣、政治家。
幼名及び通称は
麟太郎。海舟は
号。明治維新後、
安芳に改名する。

高橋泥舟（天保六年：1835～明治三十六年：1903）は幕末・明治時代の幕臣、槍術家である。山岡正業の次男に生まれ、母方を継いで、高橋包承（かねつく）の養子となった。名は政見、幼名を謙三郎、精一郎のちに伊勢守と称した。号は忍斎、後年に泥舟とした。幕末の幕臣・明治の政治家であり、剣・禅・書の達人と言われた山岡鉄舟^①は、泥舟の義弟にあたる。

生家の山岡家は槍の名家で、実兄の山岡静山（信吉）に就いて槍を修業し、神技に達したとの評価を得るまでとなる。生家の男子がみな他家へ出た後、静山が27歳で早世し、山岡家に残った英子は、道場の門人であった小野鉄太郎を婿養子に迎えた。後の山岡鉄舟である。

泥舟は、安政三年（1856）22歳で講武所槍術教授になり、万延元年（1860）同槍術師範となった。文久三年（1863）に上京中の第十四代将軍徳川家茂から浪士取扱を親諭され、特に勅許を奉じて従五位下に叙せられたという。慶応四年（1868）、鳥羽伏見の戦いに敗れた第十五代将軍徳川慶喜に恭順を唱え、同年四月の江戸城開城の際、水戸へ下る慶喜の護衛にあたった。明治四年（1871）の廃藩置県後は東京に隠棲し、槍をおいて筆を持ち、書画骨董の鑑定などをして後半生を送った。

幕末から、明治時代初期にかけて活躍した幕臣である勝海舟^②、山岡鉄舟、高橋泥舟の三人を合わせて、「幕末の三舟」と称する。

釈文は「一榻琴書夢亦清／泥舟居士書」（腰掛け一つで琴と書籍を嗜むのは夢のようであり、また清らかなことである）とあり、その内容は清代の書家・鄭燮（1693～1765）の詩である。

本作品の大きさは、縦203cm×横39.5cm、紙本部分は、縦123.5cm×横28cm、保存状態は非常に良好である。

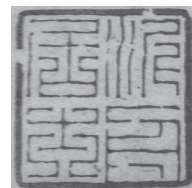
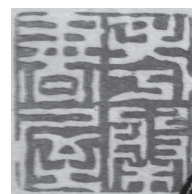
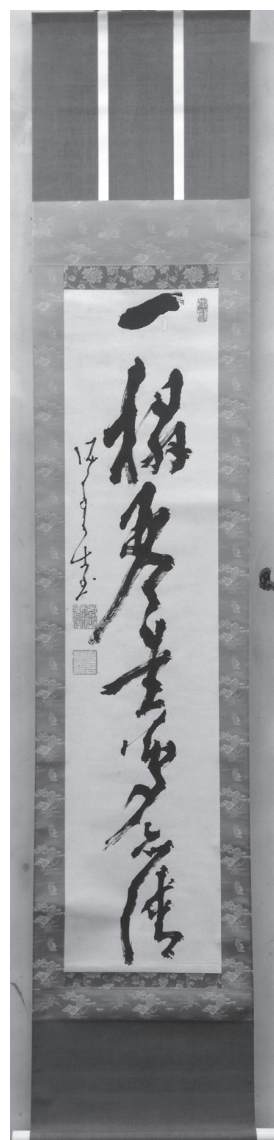
引首印は「把筆代槍」（縦4.5cm×横2cm）、落款印は、白文で「考槃書屋」、朱文で「泥舟居士」（白文朱文ともに縦4.5cm×横4.5cm）押捺されている。引首印にある「把筆代槍」の言葉は、泥舟が隠棲生活の中で作った七言絶句の冒頭部分にあたる。

把筆代槍偏愛閑〔槍で名声を得たが今はそれを筆に代えて閑地を愛している〕朝名市利不相關〔官界での出征や巨利を得ることは私には関係無い〕一瓢樂道誰爲伴〔ひと椀の飯とひと椀の汁で孤高だが心に友がないわけではない〕異世有人其姓顔〔それは異才の人であった顔回である〕

少なくとも、泥舟35歳以降の作である。

泥舟は槍一筋で若くして名士となり、将軍に忠誠を誓い、69歳でその生涯の幕を下ろすまでの約三十年間を静かに暮らした。まるでその一生を物語るように、書には彼の固い意志が内含され気迫が漲るような迫力を感じる。

〈曾我部〉



日書 32 なかむらふせつ ごんぜつくしき 中村不折 五言絶句軸

7005
物品番号
4002H4 年度
軸装

①こやましよう
たろう

(1857~1916)
日本の武士。洋
画家。画家とし
てよりも教育者
として名高い。

②まさおかしき
(1867~1902)
日本の俳人。歌
人。国語学研究
家。

③しまざきとう
そん
(1872~1943)
日本の詩人。小
説家。

④なつめそうせ
き
(1867~1916)
日本の小説家。
評論家。英文字
者。

⑤日書 38 参照。

⑥まえだもくほ
う
(1853~1918)
兵庫県出身の書
家。名は圓。別
号に龍野人があ
る。

中村不折（慶応二年：1866～昭和十八年：1943）は、明治から昭和時代にかけての洋画家。東港町の書役を務める父源蔵、母りうの長男として生まれる。幼名は鉾太郎。号は不折。（後に改名し、本名を中村不折とする。）また他に、環山・孔固亭主・永寿靈壺斎・豪猪先生などと号した。明治二十八年より小山正太郎^①らに学び生涯を通して明治美術会展覧会、明治美術会展、文展、帝展と精力的に出品し活躍した。

明治二十七年（1894）に不折は正岡子規^②と出会い、日清戦争には子規とともに記者として従軍。翌明治二十八年、日本新聞社に入社。島崎藤村^③の詩集や夏目漱石^④『吾輩は猫である』等の挿絵を担当する。

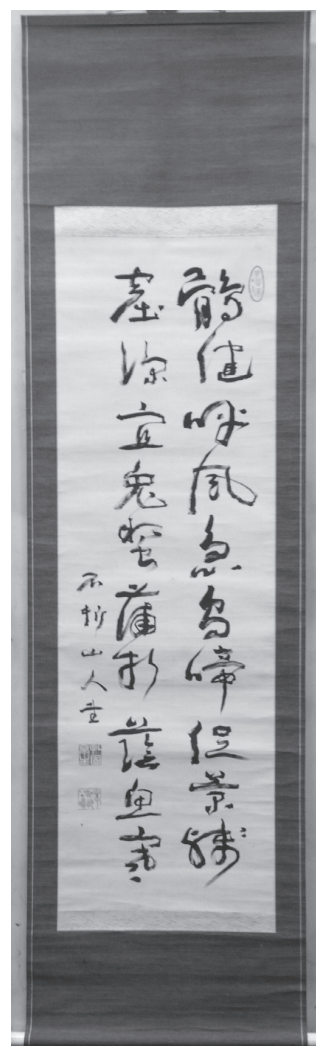
不折は書への造詣も深く、明治三十四年のフランス留学の際には、昼は絵画の勉強をし、夜は日本より持参していた龍門二十品や書譜などの臨書をするほど書に熱心だったという。明治四十一年、静養先の群馬県碓氷温泉にて、巖宝子碑や中岳靈廟碑に影響を受けた「龍眠帖」を揮毫する。この「龍眠帖」に感動した河東碧梧桐^⑤が発行人となり刊行された。また、前田黙鳳^⑥らと健筆会を結成し展覧会を開催した。大正元年（1912）六月には、碧梧桐らとともに六朝書研究会「龍眠会」を結成した。大正三年に康有為著『広芸舟雙楫』を井土靈山と共に翻訳し、『六朝書道論』として刊行。昭和十一年には「財団法人書道博物館」を設立した。現在の台東区立書道博物館である。不折の蒐集は、前述の従軍の際に中国や朝鮮半島の文物に触れたことがきっかけである。当時は拓本を数点持ち帰るだけであった。帰国し古書店に通いつめたという不折の熱心な蒐集は、中国往来の商人が直接美術品を不折のところに持ち込むほどになった。そうして、40年あまりに渡る独力の蒐集により、一万点以上に及ぶ東洋史上重要なコレクションが集まったのである。

釈文は「體健呼風急烏啼促景残／窟深宜兔蟄蒲折蔭魚寒／不折山人書」とある。これは、宋の政治家・宇文虚中（1079～1146）による五言絶句であり、廻文詩（冒頭から読んでも、末尾から読んでも意味をなし、押韻等の格律が守られている詩）となっている。

本作品の大きさは縦 199cm×横 55cm、紙本部分は縦 132cm×横 43cm、保存状態は非常に良好である。

引首印は「孔固亭主人」（直径 6.7cm×3.1cm）、落款印は白文で「孔固亭主」、朱文で「生于江都八丁塚」（白文朱文ともに縦 2.4cm×横 2.4cm）の落款印が押されている。

彼の書は、一画一画に節をつけたような線で、字形の重心に変化をつけ、行草にくずして書いている。画家である不折独自の造型性を感じることができる書であろう。 〈曾我部〉



日書 33 なかむらふせつ どうあびじゅつかい きねんがっさく 中村不折ほか 東亜美術会記念合作

ク E226

- ①日書 32 参照。
- ②くろぎきんどう (1866~1923)
大正時代の書家。名は安雄。字を飛脚、号を欽堂とした。
- ③あしのなんざん (1851~1930)
明治期の書家。篆刻家。東京都高村家の墓石を揮毫した人物。「楠山印譜」を著す。
- ④せがわまさすけ (生没不詳)
篆刻家。長州出身。号に独活大王、東台山樵などがある。高杉晋作の従兄弟。下谷五条天神神官であった。
- ⑤たぐちべいほう (1861~1930)
明治から昭和時代の書家。名は茂一郎。字は子寿。別号に蘇山外史、姑蘇仏龕主人がある。
- ⑥やまだかんざん (1856~1918)
明治時代の篆刻家。字は白王。齋号は芝仙堂、風火仙窟。寒山の外に菊香、不二山人とも号した。呉昌碩の門下。娘婿は画家の山田正平。
- ⑦いまいずみゆうさく (1850~1931)
明治~大正時代の美術史家。パリに留学し、帰国後岡倉天心らと東京美術学校の創立に参加。
- ⑧きくちしんじ (1867~1935)
菊池惺堂の号で南画の収集家。北宋の名品「寒食帖」を関東大震災から守った逸話のある人物。
- ⑨日書 32「注」参照。

本作品は、以下に記す九名による合作である。以下、下図番号の順に示す。

中村不折^①書 (図1): 「不勝清怨欲飛來／不折」とあり、白文で「永寿靈壺齋」朱文で「不折」と押捺されている。

黒木欽堂^②書 (図2): 左行から「松下問童子言師采葍去只在／此山中雲深不知処／欽堂醉書」とある。唐代詩人賈島の詩。引首印は白文で「我赤蕩宕人」とあり、落款に白文で「黒木安雄」, 「黒木飛脚」と押捺されている。

蘆野楠山^③書 (図3): 「墨池煙／靄華間雲／茗鼎香／浮竹外／風 楠山」とある。引首印は白文で「一痕新月在梧桐」とあり、落款に白文で「蘆朗氏」朱文で「南山居士」と押捺されている。

瀬川雅亮^④画 (図4): 「松」「東台山樵添老松」その下に白文「独活王」が押捺されている。

田口米舫^⑤画 (図5): 「菊」右下には落款「庚先生／菊」とあり, 「菊」字の上に朱文「米舫」が押捺されている。

山田寒山^⑥画 (図6): 「岩」左下に落款「寒山作石」とあり, 続いて白文で「田閩字白王」と押捺されている。

今泉雄作^⑦画 (図7): 「菊」右下には落款「作菊者／也軒老人」とあり, 続いて朱文で「師子業」と押捺されている。

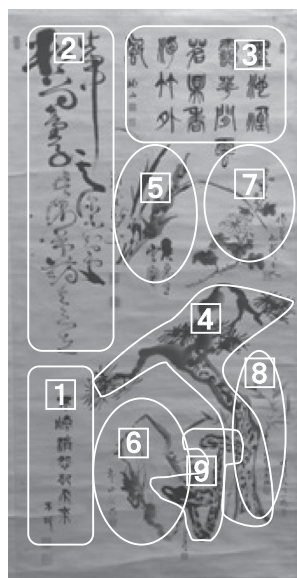
菊池晋二^⑧画 (図8): 「竹」右下には落款「惺道人作小筠」とある。続いて朱文で「晋印」と押捺されている。

前田黙鳳^⑨画 (図9): 「松茸」左下に落款「黙鳳」続いて白文「田圓之印」が押捺されている。

また、軸裏には、「東亜美術會記念合作米舫 黙鳳 寒山／不折 楠山 独活欣堂」と記されている。その下には「七仙人 知新識」と記されている。

本作品の大きさは縦 192.5cm×横 84cm, 紙面は縦 135.5cm×横 68.5cm である。軸右上に大きくシミがあり, 全体に折れが見受けられる。

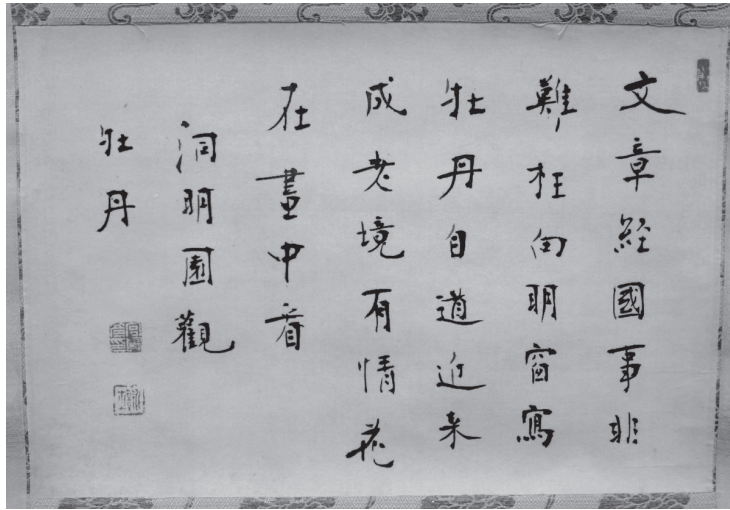
〈曾我部〉



日書 34 みやじま いし ほらあきら えんかん ぼたん
宮島詠士 洞明園観牡丹

E7005, 3010
軸装

① ちょうゆう
しょう
(1823~1894),
字は廉卿。清末
の能書家・散文
家。



宮島詠士（慶応三年：1867～昭和十八年：1943）は、米沢藩の藩校：興讓館の教授である。宮島誠一郎の長男として生まれた。字は詠士、名は吉美といい、大八と称されていた。号は、詠而帰廬主人という。幼い頃、父母と共に上京した詠士は、十一歳の時に勝海舟の門に入った。はじめ、興亜会支那語学校に入学したが、廃校となったため、東京外国語学校に転校し、そこで中国語を学んだ。明治十七年（1884）に東京外国語学校を卒業した彼は、その後清国公使館にも通い、中国史や語学を身につけた。

明治二十一年（1887）、詠士が21歳の時、清国公使であった黎庶昌の勧めで渡清し、張裕釗^①に師事した。しかし、裕釗は詠士に直接指導することはなく、「張猛龍碑」の拓を与え、独力でその書法を身に付けるよう促した。これに加え、「高貞碑」・欧陽詢・顔真卿などを学び、切れ味の鋭い筆画や、文字の懐を狭くとり、左右への長い払いの文字を特徴とする書風を構築していった。

その後、日清戦争のため帰国。明治二十八年、自宅で詠帰舎（後に善隣書院と改称）を設立し、中国史及び中国語を教授した。日中交流を担う次世代の教育に力を注いだのであった。

本軸の積文は以下の通り。

文章経国（国）事非／難 枉向明窗（窓）寫（写）／牡丹
自道近來／成老境 有情花／在畫（画）中看／
洞明園観（観）／牡丹

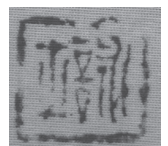
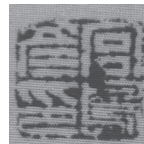
訳文は、

「国を治める道理と関係ある文章を書くのはそんなに難しいことではない、牡丹と関係ある文章を書くことは難しいと思っている。自分が年取りなつた、牡丹の知覚について絵の中に現れる。」

作品全体の大きさは、縦 121cm×横 45.5cm（本紙の大きさ縦 24cm×横 34.5cm）の行書軸である。保存状態は良好である。

引首印（印文未詳）は 2cm×0.7cm、落款印は、「宮島彦印」（1.8cm×1.8cm）とあり、その下に「詠士」（1.8cm×1.8cm）が押捺されている。

〈高〉



日書 35 たか だちくざん てんしよがく 高田竹山 篆書額

元番号なし
扁額

①こうさいたん
ざん
(1818~1890)
江戸時代後期—
明治時代の書家。
巻菱湖やその高
弟の萩原秋巖に
学んだ。

②うえむらろ
しゅう
(1830~1885)
幕末—明治時代
の漢詩人。著作
に『蒼齋詩題』
『蘆洲詩抄』な
どがある。



高田竹山（文久元年：1861～昭和二十一年：1946）は、書家、説文学者、漢学者で、名は忠周、字は土信、竹山は号で別号に未央学人がある。明治二年（1869）高齋単山①に書を学び、明治十一年（1878）17歳のときに単山の門を離れ漢魏晋唐の書法を研究した。同年植村蘆洲②につき漢学及び文字学を研究し、併せて漢詩漢文を学んだ。翌十二年（1879）、両国薬研堀に書塾を開いた。十七年（1884）に閉塾後は説文学を研究し、三代（夏・殷・周）より秦漢に至る古文字学の読解及び書法を独修した。十八年（1885）以降は、内閣印刷局に勤め紙幣・公債証書の文字を揮毫し、説文学の研究にも励んだ。

明治三十四年（1901）、『朝陽閣字鑑』を著わした。これは大正十年（1921）に補正され『補正朝陽閣字鑑』36巻が刊行された。大正五年（1916）に初版が刊行された『五體字類』は楷書、行書、草書、隸書、篆書の五体を一括に収録したものである。

畢生の大作『古籀篇』の研究には三十四年間費やし、これによって大正八年（1919）五月学界最高の帝国学士院賞を受けた。三井財閥・三菱財閥が出資者、政府が発行者となり、皇室へ献上された。国内外の大学や公立図書館、中国をはじめ欧米各国の大学図書館へも寄贈され、大絶賛を博した。

十体の書体を自在に書き分けたという書家としてだけでなく、漢文・漢詩・南画等を研究し、高い評価を得ていた。漢字の研究に最も尽力し、「学界の巨人」と呼ばれ、後世にも大きな影響を与えた。秦東書道院の学術顧問を務め、大東文化大学名誉教授に任命された。昭和天皇より「高田忠周（竹山）は国宝、我が国唯一の説文学者」と称された。

本作品全体の大きさは、縦 57.2cm×横 160cm（紙面部分は縦 39.8cm×横 117.8cm）で、
積文は以下の通りである。

聽蘇（和）而視正／竹山忠周篆

文字学の基盤研究が活かされた金文による書作である。

引首印は「永保」(縦 4.1cm×横 2cm)、落款印は「竹山居印（白文）」(2.6縦 cm×横 2.7cm)「日々平安（朱文）」(縦 2.7cm×横 2.7cm)の二顆が押捺されている。

〈豊〉



日書 36 ^{ながおうざん にきよくびょうぶ} 長尾雨山 二曲屏風

元番号無し
屏風

①おかくらてん
しん
(1863~1913)
日本の思想家・
文人。

②かわいせんろ
(1871~1945)
近代日本の篆刻
家。

本軸の筆者である長尾雨山（元治元年：1864年～昭和17年：1942）は名を甲，字を子生，通称を楨太郎という。号は雨山の他に無悶道人，石隠，睡道人と称し，齋室名は無悶室・何遠楼・思齋堂・艸聖堂等がある。讃岐高松藩士の長尾勝貞の第一子として，現在の香川県高松市に生まれた。幼少の頃から，父の勝貞について漢学を学んでいた雨山は，そこで天性の詩才を見出される。

明治二十一年（1888）東京帝国大学文科大学古典講習科を卒業した後は，岡倉天心^①と共に，東京美術学校の設立に力を尽くした。その後，東京美術学校はもとより東京帝国大学文科大学

や学習院などで教鞭をとると同時に，美術雑誌『国華』の創刊及び編集も手掛けた。明治三十年（1897）には，熊本の第五高等学校に勤務した際に，夏目漱石の同僚となり，詩文を通じて親交を深めたが，二年後，東京高等師範学校の教授や東京帝国大学文科大学の講師を再任した。明治三十五年（1902）雨山は，教職を退官し，上海に移住した。

そこで彼は，当時中国最大の出版社であった商務印書館の招きに応じ，編集顧問となった。そして，中国最初の中等教科書の編纂を行った。また，書画骨董に関する知識をもっていたことから，大正元年（1912），岡倉天心の紹介でボストン美術館の監査委員を委託され，美術品の選別にも携わった。翌年，呉昌碩が西泠印社の社長に就任するのを機に，河井荃廬^②と共に参加し，社員となった。

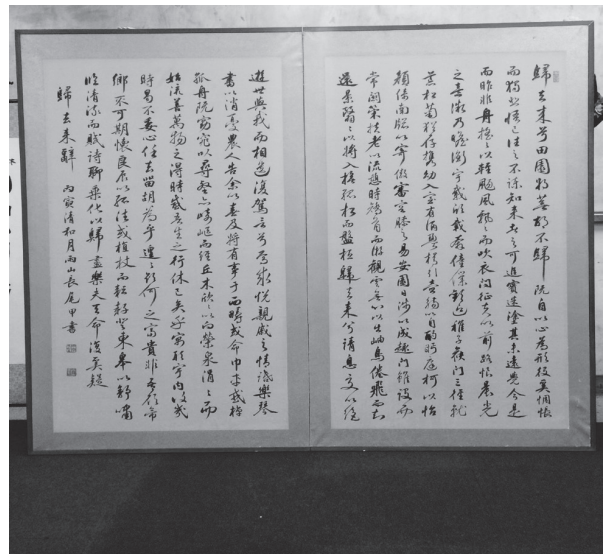
大正三年（1914）に帰国。京都に住居を構え，学者として研究と講学を行う傍ら，文人として詩書画三昧の暮らしを送った。雨山が交遊を広めた人物には，駐日清国公使の黎庶昌や書記官の鄭孝胥の他，呉昌碩・羅振玉・狩野君山・犬養木堂・副島蒼海・内藤湖南などがいる。彼らもまた，日中の文墨の世界を代表する一流の学者や文人であった。

詩・書・画のいずれにも通じた雨山は，平安書道会で副会長を務めた他，泰東書道院・日本南画院・日本美術協会などにも参加するなど，幅広い活動を行った。

本軸は縦 171cm×横 189.6cm（紙本部分，縦 150.4cm×横 78.9cm）であり，引首印は朱文で「艸聖堂」（4.3cm×1.7cm）を押捺。落款印は二顆あり，上に朱文で「甲字子生」（3.2cm×3.2cm），その下に白文で「雨山学人」（3.3cm×3.3cm）を押捺。絹本に揮毫されており，保存状態は良好。釈文は以下の通り。

歸去来兮田園將蕪胡不歸既自以心為形役奚惆悵 / 而独悲悟已往之不諫知来者之可追矣迷塗其未遠覺今是 / 而昨非舟搖々以輕颺風飄々而吹衣問征夫以前路恨長光 / 之喜微乃瞻衡宇載欣載奔僮僕歡迎稚子候門三徑就 / 荒松菊猶存携幼入室有酒盈樽引壺觴以自酌眄庭柯以怡 / 顔倚南窗以寄傲審容膝之易安園日涉以成趣門雖設而 / 常閑策扶老以流憩時矯首而遊觀雲無心以出岫鳥倦飛而知 / 還景翳翳以將入撫孤松而盤桓歸去来兮請息交以絕 / 遊世与我而相違復駕言兮焉求悅親戚之情譜樂琴 / 書以消憂農人告余以春及將有事于西疇或命中車或棹 / 孤舟既窈窕以尋壑亦崎嶇而經丘木欣欣以向榮泉涓涓而 / 始流善万物之得時感吾生之行休已矣乎寓形宇內復幾 / 時曷不委心任去留胡為乎遑遑欲何之富貴非吾願帝 / 鄉不可期懷良辰以孤往或植杖而耘紆登東皋以舒嘯 / 臨清流而賦詩聊乘化以歸盡樂夫天命復奚疑

歸去来辭 丙寅清和月雨山長尾甲書



本屏風と原文とを比較すると、一致しない文字が9ヶ所あったので、以下の表にまとめた。

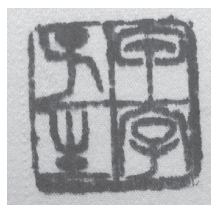
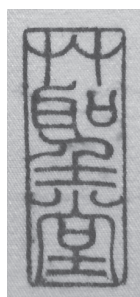
一幅目	2行目	下から7文字目	本屏風→「塗」	原文→「途」
	3行目	上から5文字目	本屏風→「搖」	原文→「遙」
	4行目	下から2文字目	本屏風→「徑」	原文→「逕」
	6行目	上から4文字目	本屏風→「牕」	原文→「窓」
	7行目	上から3文字目	本屏風→「策」	原文→「策」
二幅目	1行目	下から3文字目	本屏風→「譖」	原文→「話」
	2行目	上から11文字目	本屏風→「及」	原文→「及」又は「兮」
	2行目	下から9文字目	本屏風→「于」	原文→「乎」
	5行目	上から11文字目	本屏風→「乎」	原文→記載無し。

また、詩の訳文については以下の通りである。

さあ帰ろう / 田畑は荒れようとしているなぜ帰らぬ / 心を肉体に隷属させたのは自分がしたこと /
 なのに何故一人うらみ悲しんでいるのか / 過去のことはどうにもならぬと悟り / 未来のことは追いつ
 ことが知った / 実に道に迷いはしたがまだ遠くまで行ってはいない / 今が正しく昨日までが間違っ
 ていたと気づいた / 舟は漕ぎ進んでさっと揺り動かされ / 風は舞いあがって我が衣を吹きつける / 旅
 人にこれから先どれほどかを尋ね / 朝の日の光が微かであるのが恨めしい / ようやくにしてわが家の
 門や屋根を見やると / 喜びがこみあげて駆けるように走る / 僮僕たちは飲んで迎えてくれ / 稚子らも
 門まで出て待っている / 三本の小道は荒れかけているが / 松と菊はそれでもちゃんとある / 幼児の手
 を引いて部屋に入ると / 樽いっぱい酒が用意してある / 壺と觴を引き寄せて自分で酌いで飲み / 庭
 にある木の枝を眺めると顔がほころぶ / 南側の窓にもたれて世を見くだす思いを寄せ / 膝が入るほ
 の処が落ち着けることを実感する / 庭園は毎日走るようにあちこち歩きまわり / 家の門は造ってある
 がいつも閉めている / 策で老いたわが身を支えて自由に休憩し / 時には頭をあげてはるか遠く眺める
 / 雲は心を虚無にしてほら穴から出ていき / 鳥は飛び疲れると罫へかえることをわきまえている / 日
 の光はほの暗くかげって西に沈みかかり / 一本の松を手で撫でそこが立ち去りがたい / さあ帰ろう /
 (世俗との) 交遊はやめることにしたい / 世俗は私を、私は世俗を遺ててしまい / 車に乗り何も求めは
 せぬ / 身内の心あるよい話がうれしく / 琴や本を楽しんで憂いを消したい / 春になったと農夫は私に
 知らせに来てくれ / 西の畑で耕作がはじまることになる / 幌つき車を用意させて行くこともあり / 一
 艘の舟に棹をさして行くこともある / 奥深く谷川に沿って進み / 凸凹と丘を通り過ぎる / 木はうれし
 げに生き生きとして花が咲こうとし / 泉はちょろちょろとようやく流れだす / 万物が時宜を得ている
 ことを善しとし / わが命が死に近づくことに心動く / どうしようもない / 肉体をこの世に奇けるのは
 どれほどの時間か / どうして心を運命のままに任せぬ / どうしてうろろとしてどこに行くつもりな
 のか / 財産や地位は私の願うところではなく / 仙人の居所も期待するところではない / 気持ちいい日
 に心ひかれて一人出かけ / 杖を地にさして草ひきや土かけすることもある / 東の岡に登って心のびや
 かに詠い / 清く澄んだ流れを前にして詩をつくる / ともあれ自然の変化にまかせて死んでゆき / 例の
 天命を楽しむことにして疑うことは何もない

(『文選』陶淵明詩詳解 長谷川滋成 溪水社 P67 より)

〈立和田〉



日書 37 いはらうんがい いはらうんがいせんせいしよ
井原雲涯 井原雲涯先生書

クE43

クE39

①うちむらろこ
う

(1821~1901)

幕末から明治時
代にかけての儒
者。②なかむらきち
ぞう

(1877~1941)

明治時代から昭
和時代前期にか
けての文学者・
劇作家・演劇学
者。③あまのきじひ
こ

(1879~1945)

明治時代から昭
和時代前期にか
けての童話作家。④いとうそけん
(1876~1956)明治時代から昭
和時代中期にか
けての画家。

⑤日書 28 参照。

⑥日書 16 参照。

⑦日書 24 参照。

⑧しおいうこう
(1869~1913)兵庫県出身の詩
人・国文学者。⑨おおまちけい
げつ

(1869~1925)

高知県出身の詩
人・歌人・随筆
家・評論家。

本軸の筆者は島根県出身の井原雲涯（明治元年：1868～昭和三年：1928）で、名は録之助，字は子謙，号は雲涯で、回瀾の別号もある。口田儀で廻船業を営んでいた井原謙右衛門の長男として生まれた。11歳で田儀小学校の代用教員になった後，松江藩お抱えの儒者である内村鱸香①に漢字を学んだ。15歳で再び小学校の代用教員になると，後の中村吉蔵②，天野雉彦③，伊藤素軒④を指導した。正教員になるべく，島根師範に学び，二十代で久村小学校，稗原小学校の校長を歴任した。

明治二十五年（1892），揮毫旅行で全国を巡っていた且下部鳴鶴⑤が島根県出雲を訪れた。それまで貫名菘翁⑥に憧れ，長三洲⑦に私淑し，独学で書を学んでいた雲涯は，鳴鶴に師事することを決心した。31歳で漢文・習字の文検に合格し，簸川小学校の教員となる。塩井雨江⑧，大町桂月⑨と交流を深めた。

一方で，鳴鶴の指導を受け，碑法帖の研究にも尽力し，鳴鶴が全国の門弟を集めて創立した「大同書会」の主幹に49歳で就任する。

その業績は雑誌『書勢』の編集，『鳴鶴先生叢話』の刊行により現代に伝えられている。また，日本美術協会の，日本書道作振会の審査員も務めた。

本軸は縦197cm×横45cm（紙面部分縦135cm×横33cm）で，積文は以下の通りである。

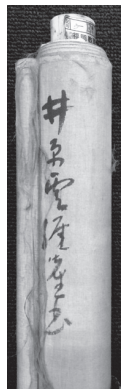
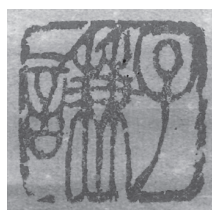
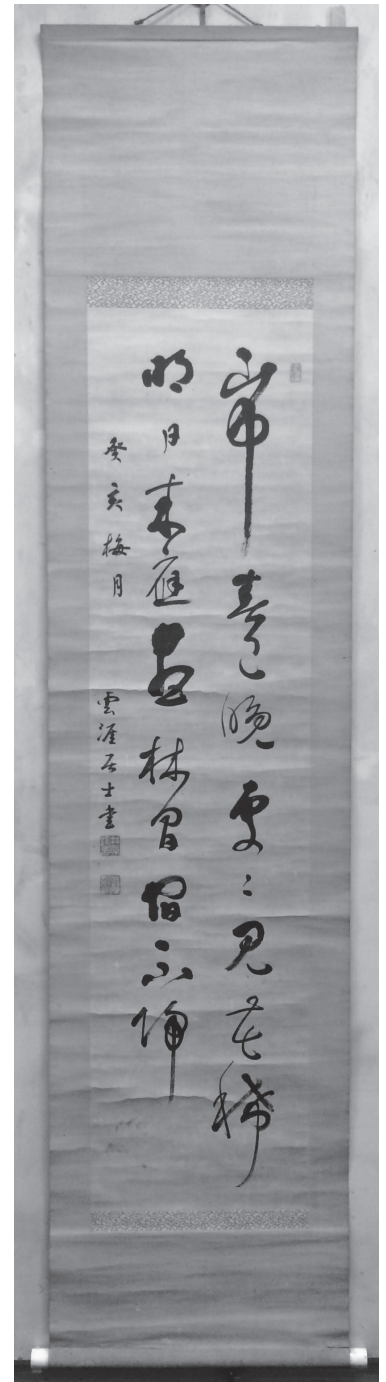
山中春已晩處（所）々見花稀

明日来應（応）盡（尽）林間宿不帰

癸亥梅月 雲涯居士書

引首印は縦2.7cm×横1.5cmで「華月春秋（朱文）」。落款印は縦3cm×横3cmで「井原録印（白文）」「子謙（朱文）」の二顆が捺印されている。中国唐時代の詩人・張籍の漢詩を書いたもので，落款部分に「癸亥梅月」と書かれていることにより，大正十二年（1923）旧暦四月，雲涯が55歳のときの作品であるということがわかる。

〈豊〉



日書 38 かわひがしへき ことう くじく 河東碧梧桐 句軸

クE225

クE319

軸先に「昭和 63 年度」の記載有軸装

① 日書 32「注」参照。

② いおきひょうてい

(1871~1937)

本名は良三。日本の国粹主義者。

③ さむかわそこつ

(1875~1954)

子規門下の俳人。病床の子規のそばに付き、遺族を見守り、子規の遺墨、遺構の保存に尽くした。

④ たかはまきよし

(1874~1959)

明治から昭和にかけての俳人。小説家。松山市長町新丁で生まれた。本名清。父庄四朗は松山藩士、柳生流の剣を使い、剣術師範であった。祖母の高浜姓を継いだ。伊予尋常中学で碧梧桐と同級になる。碧梧桐を介して子規を知った。

⑤ 碧梧桐が季題趣味の打破と生活実感の直写による主観尊重の新風を目指し、「真に返れ」と提唱したことに伴う運動。

⑥ 日書 32 参照。

河東碧梧桐（明治六年：1873～昭和十二年：1937）は、明治から昭和時代前期にかけての俳人。愛媛県松山市千舟町に六男三女の八番目として生まれる。本名は乗五郎。父静溪は朱子学派の学者であった。明治十三年（1880）頃、静溪が開いた「家塾千舟学舎」では三兄鍛の友人であった正岡子規^①や五百木瓢亭^②寒川鼠骨^③などが学んだ。号は青桐、女月、桐仙、乗殻、とろとろ坊、梧桐仙、王白石、頻婆と多数存在していたが、同二十四年 19 歳の頃に俳号が碧梧桐に落ち着く。

碧梧桐は松山中学から京都三高、仙台二高と学業を高浜虚子^④と共にするが、俳句や小説に熱中し、同二十七年（1894）には仙台二高を中退し、子規を頼って上京した。翌二十八年、子規従軍中に日本新聞社に入社。子規が自身の後継者に虚子を推していることを知った碧梧桐は子規から見放されたと思い、自責の念に苦しんだという。紆余曲折を経ながらも、同二十九年における俳句界での碧梧桐と虚子の活躍は目を瞠るものであった。碧梧桐は子規から、俳句界の新風として絶賛を受け、「子規門の双壁」としての名声は確固たるものになっていった。碧梧桐の代表句「赤い椿白い椿と落ちにけり」はこの時分に詠まれた句で、子規によって印象明瞭の句風であると賛辞を受けた。

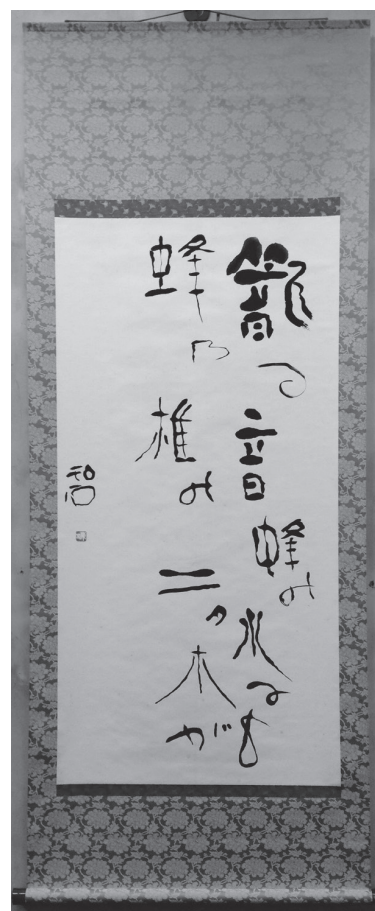
明治三十五年、子規の歿後に碧梧桐は「日本俳句」（『日本新聞』俳句欄）の俳句選者となる。虚子は『ホトトギス』を継承。子規時代には表面化しなかった二人の俳句に対する考え方の違いが次第に浮き彫りとなり、別々の道を歩み始める。その後、碧梧桐は全国行脚を通じ精力的に新傾向俳句運動^⑤を展開。明治後期から大正初期にかけての俳壇は碧梧桐派の独占するところとなる。中村不折^⑥らの協力により六朝書道研究雑誌『龍眠』が発刊されたのもこの頃である。

明治四十年、碧梧桐は不折によって鑿宝子碑・中岳靈廟碑の拓を実見した。これらに感銘を受けた碧梧桐の文字は直線的な硬い書風（第四期書風）に一変する。これをきっかけに晩年にかけて碧梧桐の書は句作の変化に伴い自由な書へと移り変わり、碧梧桐の生涯を通しての書風は、四期に分類することができる。

积文は、籠る音蜂の水にも／蜂の椎の二タ木が／碧 となっており、収録された雑誌は『三昧』である。この句は『碧梧桐全句集』によると、会津松原湖を題にして昭和三年に「籠り音蜂の水にも蜂の椎の二木が」と句作されている。

本作品の大きさは、縦 209cm×横 81.5cm であり、紙面部分縦 136.5cm×横 67.5cm である。落款印は白文で「乗五」（縦 2.4cm×横 2.4cm）と押印されている。書風は、漢晋時代の『流沙墜簡』に影響された、柔らかく伸びやかな第三期書風（大正七年～大正十一年）ではないだろうか。

〈曾我部〉



主要参考文献一覧 (*本文中に記載した文献については, 一部省略した。)

書名	編者又は著者名	出版社
『国史大辞典』	国史大辞典編集委員会	吉川弘文館
『二玄社版 日本書道辞典』	小松茂美	二玄社
『日本・中国・朝鮮／書道史年表事典』	書学書道史学会	萱原書房
『書道辞典』	飯島春敬	東京堂出版
『書の総合事典「第1部」』	井垣清明	柏書房
『書道全集 第23巻 日本10 江戸Ⅱ』	下中邦彦	平凡社
『書道全集 第25巻 日本11 明治, 大正』	下中邦彦	平凡社
『決定版 日本書道史』	名見耶明	芸術新聞社
『近代文人のいとなみ』	納屋嘉人	淡交社
『杜甫全詩集 第三巻「続国訳漢文大成」』	鈴木虎雄	日本図書センター
『日本の書 [維新～昭和初期]』	成田山書道美術館	二玄社
『日本の美術 第130号 かな』	堀江知彦	佐藤書店
『碧梧桐全集』	栗田靖	蝸牛社
『革新の書人 河東碧梧桐』	島田三光	思文閣
『近世日本の書聖 貫名海屋一館蔵コレクション』		堺市博物館
『生誕140周年画家・書家 中村不折のすべて展』		長野県伊那文化会館